

新話笑眉目録

卷之一

- 一 椀飯振舞
- 三 見たて影法師
- 五 繪師のりくつ
- 七 下手の談義
- 九 大悲の利生
- 十一 初心なきつね

卷之二

- 一 釣舟のうらかた
- 三 鶏 烏もんだふ
- 五 道中附の二度讀み
- 七 夜明のとりちがへ

- 二 章でしらする文字の作意
- 四 龍宮のあやつり
- 六 祈禱者の鹿相
- 八 水中の様
- 十 盲人の七日参り
- 十二 かはつた相撲

- 二 河伯の出来口
- 四 春雨四天王
- 六 關取の藝所望
- 八 身は寒けれど口は大名

卷之三

- 九 川ごしの順禮
- 十一 狐のしやれ

- 十 こまつた挨拶
- 十二 日待の雑談

一 新藤戸

三 浅間が獄

五 文盲の柱曆

七 腹をかゝふるかへるさのかご

九 鰻のほめすごし

十一 大學講釋

二 松に寄る鯛

四 乞食 張良

六 佛前の寶鏡

八 律儀なうたひ嫌ひ

十 盤上の出来口

十二 片言禁句

卷之四

一 蜀江の翼

三 朋友の料簡違ひ

五 年は經ぬれど新しい口

七 客のはまり

二 寸尺の取りちがへ

四 祕事は眼目

六 化生のはいかい口

八 町代の律儀

59

- 九 錢を趣向に狂歌の返答
- 十一 野郎の心中

卷之五

- 一 日本人のはまり
- 三 料理人のとんさく
- 五 番太が料簡違ひ
- 七 豆腐やが聞き違ひ
- 九 直をしてはまる商ひ
- 十一 比丘尼の心中

- 十 麴相のほめ過し
- 十二 一向宗の尤もな不審

- 二 僕が作意は御無心の種
- 四 馬耳東風
- 六 かなの讀みちがへ
- 八 云ひなし様でをかしい病氣
- 十 樵夫の名言
- 十二 五兵衛が安堵

目錄終

新話笑眉卷之一

一 椀飯振舞

或人椀飯振舞にゆかれ、歴々の中にて例の癖出で、指を鼻の穴に入れ、鼻毛二三本ぐつとひきぬいたれども、膳にはおかれず、左右の客もじろく見る。をさめ所なければこまりはてて、また元のはなのあなへさしこまれた。

二 章でしらする文字の作意

片膝立てて三味線をいだし、縁がはの柱にもたれかゝり、當世の歌や道行一つ二つ引きかゝれば、かたはらよりびくとすると、文字せんさくしたがる者出でて、只今御引きなさるゝで思ひだした、さみせんのはちと云ふ字はどう書きます。」ととへば、「撥、かう書きます。」と疊へ書いて見する。「御早書ゆる片がしれませぬ、木片でござりますか。」「いや木片では御ざりませぬ、てへんく。」

三 見たて影法師

海邊を通りける旅人、鮓の足喰ふを見て、常々咄には聞き及びたれば、眼前見る事今が始めなり、

59

とくと見てゆのかんと思ひ立ちやすらへば、又友だこ来り云ふやう、「さてく貴様は見苦しき形かな、八本の足を七本まで喰ひ給ふ、今少しはやく来りたらば、それ程まではくはせじものを、足た一本残りていかう見ぐるし。」彼の鮓聞きて、「それ程見にくきや、さらば水鏡を見申さん。」とて、海水に形をうつし見て云ふやう、「てんと團扇だまで。」

四 龍宮のあやつり

龍宮に能芝居出来て、ごばん人形くくとよばり立つれば、大小の魚ごぞつて見に行く。中に櫻鯛とおほしくて、はむき出しひれをいからかし木戸口にかゝる。「いづ方よりの御客ぞ。」とがめられて、「自分は夷三郎客。」と云うてすつと通る。次にゆるくと油ぎりたるうなぎ、是れも木戸口断りなしに通らんとするを、「いづ方の御客ぞ。」とがめられ、「拙者は虚空藏菩薩家来。」「夫れなればお通りあれ。」次にむくくとしたる大きななまこ、わうへいらしくぬつとするを、「是れはいづかたより。」とがめられ、「私は業平者。」

五 繪師の理くつ

細工繪を好む人、燒筆を持ち唐紙引き寄せ、なにやらちらりと、下繪書いてるらる、所に、日頃心やすき近所の人來り、「何のゑをおかきなさる。」「いやちとお待ちなされい、今しれます。」と、墨にて歴々とかくを見れば、く、り頭巾かぶりたる親仁、居風呂に入りたる繪なり。見る人、「是れは大黒さうにごさる、だうけたるお繪かな、いかう面白い。しかしいかな大こくでも、ゆへ入るにづきんは著ますまい。」といへば、亭主、「さうではござれど、づきんがなければ素人にまがひます。」

六 祈禱のそさう

いつか先に降つた儘やら、思ひだされもせぬ長日でり、近在の百姓氣の毒に思ひ、江戸のそんじよう其の町に、奇妙なる法印有りて、雨の祈り大めいじん、祈りもはてぬにはや雨がふるけな、此の人たのめと、お山伏の方へ人をやり、右の段たのむ。法印心得たりとて出でたつ。其の日の装束は、かきの衣に大太刀はき、ごまもちの様なる頭巾をいたゞき、いら高數珠、金剛杖、其の外衣ふく等、爰をはれと綺羅をやり、葛西の方へおもむく。路次にてしる人出で逢ふ、「法印いづかたへ御さる。」といふ。「けふは頼まれて雨の祈りに參る。」「さう見えていかうりつばな御装束、でがようござる。」山ぶしきいて、「さればくふらねばようござりますが。」

七 下手の談義

いでく聴衆のねむりさまさんと高座に上り、殊勝らしい顔してかね打ちならし、選擇集など何やら巻を開き、頂戴しておだんぎにかゝられしが、かの説きて殿辯がわるうて、した、かなるおへたな

59

れば、五人歸り七人へり、やう／＼跡に二人残り。夫れをばしらで、和尚はありがたさうに目をふさぎ、「只りんじう正念南無阿みだ佛／＼と御となへなされい。」何れもといはうとして、目をひらき見まはせば、ちやうじゆはすきと逃げ歸り、残りては我共に三人なれば、高座を一つとんとたゝいて、「な御兩人。」

八 水中のためし

誰やら父もしれぬ子をはらみし下女有り。はたしてうみ出しければ、内のうばやら物ぬひやら大勢寄り合ひ申すやう、「さて其方は、いつのまにかやうに子をはらみしぞ、夫はたぞつ、ます言や。」とせめかくれば、下女赤面して、何のいらへなし。其の時物ぬひかう者なるものにて、「か様な男のしれぬ子には、親のしり様がおざる、たらひに水をくみ胞をひたしますれば、男の定紋が胞にあらはるゝものといひ傳へました。」とて、たらひに水汲みえなをひたし、「さあ／＼うば殿御覽なされ。」とどれ見ませう。」と、のぞき手を打つて、「是れはしたり紋盡しぢや。」

九 大悲の利生

日本廻國六十六部のひじりと、さもいかつがましくどしめく修行者、兩國橋を渡りかゝりしに、折節川の中にさんけく六根罪障、大山大小もささず、しかも丸はだかなる垢離とり共、丹誠をなして

らいはいするを、往來の人々勢立ちどまり見物す。修行者も、「ちと我にも見せ給へ。」とて人の中をおしわくれば、もぎだうなる無分別ものありて、「爰な六十六部めは人をつきのけ見たがるわ。男を見そこなうたか。」といひさま、むなぐらつかんで川の中へなけ入るれば、有りがたや大悲觀世音菩薩、紫雲に乗じてあらはれ給ひ、もつたいたなくも左右の御手にて、六十六部が尻を抱へ、橋の上へおし上げ給へば、修行者は最前の奴をとらへ、「己めにくいやつかな、たちまち報いを見せん、うぬがせしごとく川の中におとすぞ。」と、まつさかさまにつきいければ、やつこ、「何と觀音様われらをばすくひ給はぬか、南無觀世音々々々々。」となへければ、觀音是れを御覽じ、「なんほすくひたうても、やつこのはなりませぬ。」

十 盲人の七日参り

兩眼がしひては半分死んだも同じ事、至心に佛ほさつを祈らば、又ひらく事もありやせんと、淺草の觀音へ日參、一七日め其の夜は寶前にこもり、祈念を致しながらとろ／＼と眠りければ、有難や大悲觀世音顯はれ給ひ、「汝が願望何とぞ叶へてやりたし、併し當分目玉の出來たがない、屹と思ひだしたり、惡七兵衛景清が兩眼、むかし我に預けたり。先づ／＼是れを得させん、善哉々々。」と唱へ給ひ搔きけすやうにうせ給ふ。夢さめ兩眼を開きあたりを見まはせば、何にても残る所なくあきらかに見

59

ゆる。是れはく有難や忝しとふし拜み、我が家をさして歸るとて、淺草橋の見附の内より、ねほれたる様なる貌にて、ゑほし白張きたる鹿島の事ふれ、ひよこくくるを見付け四五間とびさり、脇さしにそりを打ちて、「それへきたらせたまふは、まさしく右大將頼朝なり、かくごなされい〜。」

十一 初心なきつね

龜井戸の藤見にゆかんとぶらくと行きけるに、小狐此の男を見てばかさんとや思ひけん、忽ちうつくしき若衆にばけて來り、あとや先になりて行きける。此の男はじめより化けたるを見すましけるが、態としらぬかほにて、「是れ〜お前はおひとりさうなが、どこへ御出でなさる〜。」といふ。「いや私 は龜井戸の藤見に參ります。」と云ふ。かの男「私も藤見に參ります、幸ひの事御同道申しませう。」「さやうならば御つれなされて下されませい。」と打ちつれ、程なく龜井戸に著く。ふち最中盛なるを見あるき、「いかうくたびれました、酒一つ上げませう。」とて茶屋へ寄り料理杯いひ付け、かの化若衆にひじひにくはせ、「日もたけました。いざ歸りませう。」と打ちつれ、元來し道に歸りけるに、はじめ化け出でし所とおほしき邊にて、かの若衆「私は此の近所の者、扱々けふはかたじけなうござります。」というてわかれける。かの男跡よりの化若衆をつけて見けるに、狐の穴とおほしき所へはひりける。穴へ耳をよせひかそかに聞きるたりしが、穴の内にて云ふやう、「扱々けふはいかう馳走

になつて。」と云ふ、「それはどこで。」といふ。「されば〜。」と右の趣をかたる。親狐にや有りけん云ふ様、「だまりやれ、それは馬糞であらう。」

十二 かはつた相撲

そんじようそこに勸進相撲あり、いざ見にゆかんと、四五人うちつれ行きけるに、相撲程なく始まり、段々取りける程に、寄りの方よりいかにもたくましき男出でける。名のり合はせて、行事がいざと聲をかけ、兩方既に組み合ひけるが、暫しが間は勝負は知れざりけり。えいやつと云うて目より高くさし上げ、「あ、見えたかく〜。」と下より聲をかくれば、さしあけられてるながら云ふやう、「いやいや見えぬ〜、若しなけて見よ、左の方へなけたらば、左の胸腹けやぶらん、右の方へなけば、右のひさけをらん。」などといへば、此の男なけられはせずこまりはてて、やはりさしあけてるながらいふやう、「人ごろしよく〜。」

59

新話笑眉卷之二

一 釣舟のうらかた

だまれく喰ひさがつたぞ、此のやうな時高聲すれば、魚がにぐるものぢや、さあ／＼こはぜがかつた。「こ、な人は何をいやる、まだ釣竿をあけもせぬに。」「いやどうでもちがひはない。」と釣り上げて見れば、こはぜなり。「何と我をつたか、此の次には小ぶなをつらう。」といへば、又小ぶな、うなぎといへばうなぎ、「是れはこれは我折つた、何としてしれますぞ。」「是れには大事のくりがござる、一つ二つ云うてきかせうか。」「夫れはよう御座らう、教へたまへ。まづはじめのこはぜはいかなる占ひぞ。」「されば水中にはりを入ると、一度に懐中の鼻紙袋がうごきましたさかいで、こはぜとはうらなひました。」「扱もきこえましたる占ひかな。」「また只今の鰻は、時ならぬやつがか、りましたの、うろたへふぐ、まぐれあたりでござらうと存する。」「どうしてふぐとはうらなはしやれたぞ。」「されば／＼大事の事の、釣竿に死脈がうちました。」

二 かはつた出来口

浅草川のかつば若衆に化けて、三圍の土手下涼み舟のか、りたるあたりを、氣の毒さうなかほしてのくを舟より見付け、へうきなる男舟ばたへ出で、「若衆さまは何ぞ落し給ふか。」といへば、「仰せの通りはな紙袋をおとしました、其の中に大切な物がござります。」といふ。「それこそ私水中は得もの、取つてしんじませう。」とてはだかになり、川へ入りさまに、「取つてはしんじませうが御合點かえ。」と云ふ。化若衆聞いて、「夫れは此方に望みでござります。」

三 鶏鳥問答

或時鶏とからすと出で合ひてはなしけるに、鳥にはとりに問うて曰く、「私の夜明に時を定めて鳴くさへ、奇妙なといふ人あり、貴鳥は時々をたがへず鳴き給ふ事、數學によりてなる事か、さりとてはふしんに候。」鶏答へて曰く、「是れにこそ大事のならひ候へ、われら時のつくりやう極祕なれども、御志深ければあら／＼語り申さん。先づ天の行度を能くしり、日月星辰すわり能く見覚え、夫れにならつて鳴き申す事なり、至りては重々口傳。」と、自慢顔してささいらしくいへば、鳥あへて問ふ、「扱々尤もさうな事かな。しかし爰に不審有り、雨ふりや闇の夜には何を目當になさるゝぞ。」には鳥是れにこまりて、「正直はめつた鳴きぢや／＼。」

四 春雨四天王

春の夜の降り暮したるつれづれに、頼光の御前にはいつもかはらぬ四天王、茶のみ雑談さまんぐに蛇むじなの物語とりくくなる中に、坂田金時口不調法なる男にて、むづくとして居たりしが、何とかしたりけん、屁二つ三つほんくと取りはづしければ、座中眞貌になるも有り、くつくくと笑ふも有り。其の時金時眼を見出し、きばをかみこぶしを握りて云ふ様、「天晴眼にさへぎるものならば。」とそこらをねめまはしたは、いかい候の。

五 道中付の二度よみ

「朝鮮扇十三文、模様はだんく御望み次第、道中付もござります。」と、賣りありく處へ、うつけたる男來り、「どれその道中付の扇望み。」とてかひとり、そろく開き讀みながら行く。まづはじめに品川より川崎への道のり、其の次だんく上方までの宿次を、扇兩面をよみをさめ、なんの心もなくうかうかと扇をかへし見れば、又品川川崎とあれば、うつけものぎやうてんして、扱はばかされしと心得、指の先に唾を付け、左右のまゆ毛をひつたりとぬらして、「油断はせぬぞ。」というた。

六 關守の藝所望

地獄の道に新關をたて、まぎらはしき者を吟味し、其の中に藝の有りさうな者をとらへ、役者のこわ色杯望みて聞きか、りける所へ、いかにも縁びんせいの小作りなる男來る。せき守の鬼かれをおさ

へ、「汝は何ぞ一ふしいへさうなやつぢや、なんでもいへさあ〜。」とせがむ。「それなら半太夫ぶしかたりませう。」夫れはよかる、俺が三味線ひき申さう、小鬼共そのさみせん〜。」とひきか、れば、夜あけ鳥もいはばきけと語り出し、順禮が情にてまでかたり、跡の鬼一口がさし合ひ、何の氣もつかずうか〜とあんぜしが、爰でできてはなるまいと、いんぎんにこそ語りけり。鬼様口をのがれしもといへば、あかおに三味をなけすて、「此の男はぶひやうしなる奴かな、じあまりで三味せんがひかれぬわ。」と腹をたてた。

七 夜明のとりちがへ

年たけたるかけま、もはや勤めやめてよい頃ぢやとて、吉日を選んで元服し、以ての外に大きなるぶてうはふな名をつき、よいきみぢや〜と月代をなでまはし、した、か酒をのんでねぬ。夜あけがたに目覺め、おほえず我が月代へ手をやり、やはり前の氣で、「もしえ〜夜が明けました。」といふ。そさうなわろの。

八 身は寒けれど口は大名

尾羽をうちからしたる浪人、なに程の寒氣にも垢びかりのする裕ひとつ、やぶればかまをもめん絲にてぬひ合はせ、大小のつか頭落し、さやのわれたるを古元ゆひを墨に染めてく〜り、それでもはな

59

さぬく、りづきん、じふめんつくくりてはりひぢし、通町を行くむかひより、町人のちかづきけるをとらへ、頭巾もとらずに、「扱々久しや、おてまへは身共が方へはすきと見えぬ、近日ちと見えたらよからう。」などと、横へいにいひちらす。町人もよいかげんにあいさつして立ちわかれば、あとよりとものもの、「もし檀那様、只今のは何やつでござります。」「あれは浪人衆ぢや。」「何にもせよづないやつかな、あの様なものにおかまひなされずに、見ぬ貌で御通りなされたがよい。」といへば、主人、「いや、あの人は横へいながよい、あのなりでいんぎんなれば、乞食にまがふ、あれでもつた人ぢや。」

九 川越じゆれい

世間にはやるくわん音講中、十二三人も云ひ合はせ、秩父順禮と心ざし、祖父祖母まじりに、一ばんにはとゆりかけうたひながら、五六番も札打ち、かなたこなたとめぐりありく。道に小川いくつもおほかりしに、一ところは廣なる川へ行きかゝり、「何とやらんふかさうなが、此の内に水心しりは坐せぬか。」と云うて、川のおもてを見まはせば、先へ壹人わたる男有り、中ほどを渡るを見れば、首許り出して行く。講中見て、「川のおもて大かたした、あれよりふかい所はあるまい、いづれも渡り給へ。」と云ひ合はせ川に入り、行けども腰だけなり。是れはしたり先の男は首だけなりしが、今の

間によもや水は落ちまい、是れはくわん音御かごならん。」と、先の男を見やれば、やはりくびだけに渡る。いかさまふしんなる事と目をつけて、くがへあがるを見れば、道理こそるざりぢや。

十 こまつたあいさつ

此の裏にかし店有りとのはり札に付き、其の家主の方へ行き、「かし店の見えまする、かりましたいが。」と望む。「御商賣は。」とへばつきごめやなり。「夫れならばなませぬ、家がひすむやら、柱が下るやら、たまるものでなし。」とてかさず。又其の跡より色黒くせい高く、がんじやうなる男來り、「御店かりましたい。」と云ふ。「御商賣は。」「井戸掘。」「以ての外なませぬ、先程つき米屋にさへかしませぬ、ねだも何もたまつてこそ。」「是れはがてんの參らぬ御あいさつかな、つき米屋とちがひ、先々を歩いて掘りますれば、御家のかまひに少しもなる事では御ざらぬ。」といはれて、家主、「私は手前

十一 狐のしやれ

ある隠遁者めせきの笠に桑のつるにて、ぶらく遊びに出られしが、道にて心あひの人につい知人になつて、連立ち行くに、龜井戸へ行くかと思へば根津に來り、根津かと思へば佃島邊なり。不審に思ひ、板へぎの様なる小脇指に手をかけ、「己め何ものぞ人間ではあるまい、正體を現はせ。」と

59



せめられ、彼の男後むきになり、したゝかなる尾を出して、「正直は是れで御座りやす。」

十二日待の雑談

春の始めの日待なればとて、一家一門は申すに及ばず、常にはなす友だち、あたり隣の心あひを呼びあつめて、酒えん某將某雙六や、遊藝さまゝ事をはり、よも山の咄になりぬ。かたはらより進み出て云ふやう、「あのするがのふじは、建久四年のいつ何日に出現したと申すが、一夜の内には扱々大きな山が出来ましたの。」と云ふ。物知り顔なる親仁すゝみ出て、「否々それは俗説なり、それより前の富士の歌が萬葉集にござる。」又一人すゝみ出て、「こなたのが道理ぢや、建久四年に出来たと云ふは偽り、是れもみな梶原がいひ出した事とおほしめせ。」

新話笑眉卷之二終

新話笑眉卷之三

一新藤戸

是れは佐々木三郎盛綱にて候。扱も今度藤戸の先陣を仕りし御恩賞に、備前の兒島をたまはつて候。今日吉日にて候ほどに、只今入部仕り候。所の人の渡り候か。狂言處の者の御尋ねは何事にて候ぞ。ワキ近頃申し兼ねたる事に候へども、此の所不知案内の者にて候、急用に候間廁を教へて給はり候へ。狂言狂言いやゝ此の事においてはなりますまい。なぜに。うらををしへたら又殺されませう。

二松によする鯛

若殿様鯛があがりたいとおしやる、それゝとありければ、小鯛の焼物ぴんゝとしたるを參らす。片身まるり今一つ喰ひたいとの御意、替りなければ何とせんと思案し、御庭の松を御覽遊ばしませと云ひ様、うらがへしまるらすれば、其れも皆あがりしまうて、「何と今一度松が見たい。」との御意ぬかるものではない。

59

三 淺間がだけ

かたい日蓮宗土用干するとて、箱の底より眞黒になりたる紙に、よささうな手跡で、なにやら經文の書きたる紙ぎれ出づれば、不審に思ひ裏の方をかへし見るに、法然上人の御手跡とあり。じやうこは大きに腹を立て、「身共が家にかやうの物有るべきやうなし、何者か入れ置きけん、さながら捨てられもせず、さらば火中せん。」となべをはづさせ、焼火の中へ打ち入れければ、ふしぎやな煙のうちに、もめん衣に手巾ひつさけ、膝切のぬのこ著て股引したる道心者あらはれ出で、首に懸けたる鉦鼓打ちならし、念佛ひたまうしに申せば、此の男彌腹を立て、さまざましかりても消え失せず、女ばうかしこきものにて、かまどのきはへつかくとはしり行き、「是れく御坊宗旨が違うた。」といはれて、かき消すやうに失せにたり。

四 乞食張良

白髪たるしはき親仁、あたらしき雪踏をはき、橋の上を通りしが、何とかしたりけん、せきだ片て川の中へおとし、あたりを見廻せば橋のもとにひとりの乞食有り、「その方が名は何といふぞ。」とへば、「長兵衛。」と答ふ。其の時おやぢ、「やあいかに長兵衛、あのくつ取りてはかせよ。」と云ふ。長びやうる易からず思ひて、「只はなりませぬ。」また親仁、「それならばしあんが有る。」とて、例のしはいさん册を出し、残りかたのせつたも蹴こみ、「さあく長兵衛兩がで一文やらう。」

五 文盲の柱曆

至極文盲な者、柱に畧曆の張つて有るを見て、「あれは何と申す物でござります。」と云ふ。「是れは柱曆でござる。」と云ふ。「其の柱曆は何になりますぞ。」「扱々文盲なる人かな、一年中の事をしるものでござる。」「さては年中の事はなんでもしれますか、さやうならばちとたづねませう、今年のかほ見せに、嵐喜世三郎はどこへまゐります。」

六 佛前の寶鏡

「今日觀音参りいたし、至心に禮拜をなし、下向いたしますれば、きだはしによい鬘鏡が落ちてござりました。あたりの人に、何れものではないかと問ひましたれば、主はござらなんだ。」と語る。親仁是れを聞き、「其の御鏡は觀音の御授けであらうに、なぜに取りて歸らぬぞ。」と云ふ。「されば私も取らうとぞんじ、そばへよりつくばひ手まで出したれど、取りましなんだ。」「夫れはなぜに取らぬぞ。」むすこ云ふ様、「下から人が見てました。」

七 腹をかゝふる歸さのかご

品川がよひして、所でも餘程はのきく男、ある時朝の歸るさに、亭主門へおくりて出で、「ちとお待

59

ちなされませ、かご申し付けませう。」とて、所のかごかきを呼び、「さあ〜めしませい、ふとんがなうてはお居所がいたみませう。」と、内へかけ入りもめんぶとん引きさけ来る。「是れは〜かたじけない。」などと云ひて手にとれば、裏の方になにやら白きもやうあり、引きかへして見れば、そめぬきに踏馬御免と大筆に有り、「是れはならぬぞ。」

八 律儀な謠嫌ひ

うたひといへば七里逃げ、つゞみ太鼓には耳をふさぐきらひ有り。ある夜うたひ講の場所へ、ふと行きかゝりければ、三番め松風最中、曲へかゝる前にて、神のたすけも波の上、哀れにきえしと大聲にてうたふ。歸られはせず、傍にいやながら暫くれば、曲のおし哀れ古をと下音にかゝれば、かのきらひていしゆの袖を引いて小聲になり、「拙者はもはや歸ります、私への御遠慮ときこえます、やはり前の通り高う御諷ひなされませい。」とて、こそ〜と逃けて歸つた。

九 鐺のはめすごし

古き鐺をもとめ、こしらへいかにもりつばにして、ある座敷へさして行かれしに、「さて〜見事なおこしらへかな、いか〜しをらしい鐺でござります。」と云ふ。「されば〜、よほど能いつばとぞんずる、しかし薄うござる。」といへば、「いや夏はようござります。」といふ。

十 盤上の出来口

心やすき座頭の坊夜咄に來りければ、亭主「今夜ははなしを止めて、將棊にませう、貴さまはいかうつよいときいた、將棊盤もてこい。」とて取りよせなほし、こまばら〜とならべ、「さあ指しませう。」と互に向うてさせば、座頭は殊の外工夫強きものなれば、亭主よほまけ色に見えける。をりふし燈ふと消ゆる。「坊様すこし御待ちあれ。」と手をひかへるに、座頭「是れは何としてと〜こほりたまふぞ。」「いや燈が消えました。」座頭「くらくてはさされませぬか。」「どうしてくらうてさされませうぞ。」さとう聞いて、「さて〜めあきは不自由なものかな。」

十一 大學講談

頃日文字讀しならひ、集註さへ讀みもせいで、はやかうしやくこそをかしけれ。大學の道は明德をあきらかにするに有りと讀み出して、何やらえ知れぬことをよささうに取りつけ、一座かうじをはりぬ。ちやうじゆの中より一人進み出で、「ちと尋ね申したき事有り、此の書の内に彼の澳を見ればとは何の事にて候や、承りたく候。」講師の曰く、「よい御氣つきなり、いひてきかせ申さん。」とて、つがもなき事いはる、こそをかしけれ。「かのきのくまとは、唐は大國なれば深山廣野多し、其の所の大木のうへ、熊があがりて晝ねして居まするを、唐人ども下よりふりあふむいて見た所をかく

59

は申すなり。「扱々おもしろき説かな、其の下に斐たる君子有りとはいかに。」答へて曰く、「こなたはお若い、肝要ばかり問ふ人かな、某もこゝには骨を折りたり、近頃こびたる書にてかんがへ出し候、本草綱目で見當りました、ひたる君子とは、君子のみいらになつたを申す。」

十二 片言の禁句

そんじようたればじつの兄弟といへば、「少しも似た所なし、腹がはりならん。」と雑だんする中に、いかにも文盲にてしかもこびたがるものさし出で、「あれは私能くぞんじました、成程十死一生の兄弟でござる。」と、かほをあかめて云ふ。「こゝな人は龜相な人かな、一腹一生の事か。」といへば、「あゝさうでござります。」

新話笑眉卷之四

一 蜀江の翼

うつそりとしたる男、ある夕暮に天狗につかまれ、山々嶽々まはりくしが、彼の天狗ちと草臥がついて、「汝もそこに少し休め。」とて、岩の上につきする、其の身は羽をいうくとのぼし、泰然として坐す。彼の男何とぞまかれんと思ひ、天狗の側に近々と寄り、有りたけの智慧をふるつて、てれん云ふこそをかしけれ。「さてもくこな様の羽は、日本ではつひに見ませぬ、渡り物か、なんといふものぞ、見事な物かな、四座の能太夫も此のやうな物は持ちませぬぞ。」と、めつたにほめはせば、天狗じまん貌にて、「さあというて尋ねて見よ、今はこんなはないさ。」

二 寸尺の取りちがへ

段々寒空になれば、革頭巾がなうてもなるまいとて、切付屋へ行き、頭の本とらせて、もやういかにもだてにこのみ、いつくか出来ます、其の節取りに参らうとて、其の目になれば、「なんと先日あつらへた頭巾は出来候や、取りにまるりたり。」「成るほど出かしました。」と取り出す。「是れはくよ

59

いお手ぎは、さらばきて見ませう。」と被れば、頭の本取りそこなひけるか、きしみてあたまいらす。「紙を御出しなされませい。」とて、一枚頭へのせ無理にすりこめば、大かた入りぬ、「まだ思ふやうになし。」といへば、かはや云ふやう、「二三町おあるきなされますれば、とくと入ります。」と云ふ。たびかなんぞのやうに。

三 朋友の料簡ちがひ

上方へ久しぶりにて下りたる人に、江戸橋にて出で合ひ、「扱々お久しや、いつお下りぞ御無事か、何として長々御逗留、定めてよい事づくしで、お下りが遅かつたと存する。」といへば、「いや、御察しと違ひ申し候、拙者妹が死にました故に、久々とうりう。」と語れば、聞きもあへず手を打つて、「夫れは誰とえ。」とて氣もつぶれ貌、上がったの女がしんだとさへいへば、とかく心中と心得たは一笑。

四 祕事はまつげ

今月は祝ひ月、殊にけふは朔日、神明参詣せまいかと二三人誘引し、芝飯倉の方に行けば、宇田川橋のうへ、した、か荷付けたる馬引いて行く。連だちのうちとんてきもの飛びか、りて、馬の尾を四五本指にからんでぐつとぬく。其の内年かさなるもの、かのとんてきをしかりて曰く、「しりたまはずや、馬の尾はぬくものではなし、いかうしさいの有る事なり。」とて、ぎやうさんさうにしかられて、「扱々ひよんな事しました、いはれの有るを夢にも存せず、かたりてきかせ給へ。」「いや、大事大事故途中にて申さぬ事なり。」「きかねば氣にかゝる少しはなし給へ。」「しからば語りて聞かせ申さう。道ゆく馬に飛びか、つて尾をぬけば、馬がいたがる。」

五 年は経ぬれど新しい口

六十の賀も、三四年先に過ぎたらんと見ゆる親仁、色町をうそくのぞきありけば、遊女共見て、「扱もく、其のふるい貌で、爰らへは似合はぬ、きついしわかな。」と笑へば、「けふはしわが多い筈。夕たゝますにねました。」

六 化性のはいかい口

獨り旅のもの、日は暮れかゝる、足を早めて山ぎはを行けば、どうやらそつと寒くなるほどに、ふりあふぬいで見れば、山のかひよりはな火しゆつしゆと出ると、例の幽霊太鼓どん／＼とうてば、三里の灸あて額にあてたる幽れい顯はれ、やい／＼と呼びかくる。旅人飛びしさり、腰のものにそりをうつて、「狐狸の所爲ならん、正體をあらはせ。」と大音あけていへば、いうれいひたひをおさへて、ぶる／＼とふるひ、「あゝら峯くるしや。」と云ふ。かの男此のことばを聞いて、「扱は山のせいにはま

59

つた。」とて行き過ぎぬ。

七 客のはまり

ある夜四五人うちより、咄もしみて夜もいとふけけるに、鼠のさわぎあるき、梁をつたふを見て、こざかしき男猫の鳴きまねをしけるに、ねすみはりの上にてふりかへり見て、「白人藝には餘程よい。」といふ。

八 町代の律儀

堺町中村市村兩座共に新狂言、朝の六つから羣集する事えいたうく、それぐのひいきぐ、竹之丞へ行くもあり、又勘三へ心さすも有り。こゝに御屋敷の女中がた六七人、ふうりう出たち、或は中村源太郎がもんつけたるもあり、また嵐喜世三郎が紋付けたるも有り、おもひくの役者のもん付け、ずらりくとおやち橋を渡り、堺町の方へゆくを、見せもりの若いもの見つけ、「扱もくだてなる女中かな。」といへば、どれくというてとなりからも立ち、むかひよりも出で、方々の家々から若いものども、縁ばなへ出で立ちさわぐをみれば、自身番所より六十餘りのおやち、町代とおほしきが出て、「わかしいの騒がせらるゝな、かはらのけぶりでごさる。」

九 錢を趣向に狂歌の返答

すこし小ばいはいもせらるゝ、樂人、金澤八景を一見し、夫れから鎌倉の谷々、其の外古跡共見めぐり、籠釋迦に参り、御本尊の開帳をのぞみしに、同宿がいはく、「錢百文御出しなされねば、拜ませます事なりませぬ。」と云ふ。風雅人例のくせをおこし、やたてより筆ぬき出し狂歌一首、

此のほとけ錢をださねば見せぬじやか

木じやかかごじやか扱は慾じやか

とかき、「是れ見給へ。」とて同宿に見せければ、此の坊主とんさくものにて直に返歌、

慾じやかといふはばかじやかたはけじやか

さてはうき世のあばれものじやか

十 そさうのほめ過し

始めて行きたる所にて、さまん物の物語ありて後、「さあく御ねころび有りて御咄し候へ。」と云ひながら、ていしの勝手より幼子を抱きて座敷へ出る。客の中にもそさうなる男有り、其の子を見て、「さてくよいお子かな、御壽命もながからん、第一鼻の下がのびてよし、おとしはおいくつぞ。」と問ふ。亭主、「いやせん先月生まれ申したり。」鹿相者、「夫れにはいかうおわかう見えます。」

十一 野郎の心中

59

ずんど粹な男、舞臺子にふかくなじみ、ある夜のたはぶれに、「いかにしてもそことの心中の程、心もとなし。」などいへば、彼の野郎云ふ様、「私が心の程を、竹なら二つに割つて見せたし。」といへば、客、「いや、二つにわつたらしくそがでよう。」

十二 一向宗の尤もな不審

祖父祖母つれ立ち御堂参りして、ありがたさうに本尊をらいはいし、さて同宿にちかづき、「こなた様にたづね申したきことあり。此方のしうしで、肴くうてもくるしからぬは、どうした事でござります。」同宿の曰く、「くるしうないしさいがござる、先づ我等がそしの御名が肴の名にて、しいら上人といひませぬか、其の上お師匠は黒鯛ほね上人、それでわたくしどもの名も、どちやう坊主と申します。」

新話笑眉卷之五

一 日本人のはまり

毎年江戸へ商ひにくる阿蘭陀人、品川まで来り、いつもよる茶屋に行き、江戸入なれば装束などしかへ、亭主にむかひ、おらんだ口にて、なんの事やらいひちらす。ていしゆ通辭にむかひ、「あれはど云ふ事でござる。」といへば、通辭、「あのことばは馳走の仕様がわるい、料理が散々でくはれぬと腹立ちていふ事なり。」と語る。ていしゆ、「さてもくにくいおらんだめかな。」と思ひ、用有りけにそばへ立ち寄り、日本語葉は通じまいぞとおもひ、つうじの聞かぬやうに、「己にくそをくらはせたい。」といへば、おらんだ人聞いて、「うぬくらへ。」といふ。

二 僕が作意は御無心の種

葛西あたりの草深い所がおもしろいとて、江戸から隠居したる人有り、隙さの儘に、あるときはふせへ参るの、鹿島へ行くのとて、大かた宿に居る事はまれなり。留守預りの僕に、うのくそ久六とて大氣ちやうなる若もの有り、隙のまゝに毎日晝ねおこたる事なし。或時背戸の藪よりした、かなる狐

549

來り、能く寐入りたる所をこそぐりつ、はなけをぬいつ、さま／＼になぶる。久六目をさましかつばとおき、彼の狐を取つておさへひさの下にしき付け、大の眼に角をたて、「扱々うぬめはにくいやつかな、かゝもないうのくそをたぶらかさんとは、なか／＼ぞんじもよらぬ事、命をとらんと思へども、忌の日なればたすくる、自今こゝへ来るな、若し來りてもまがひなきやうに、印付けてくれん。」とて毛ぬき取り出し、耳の上までたうけん額にぬきあけ、それ行きをれとつきのめす。狐うれしさうに尾をふつて、藪の方へ逃げさりけり。其の後又晝ねしてゐる所へ、例の狐來り枕元につくばふ。久六むくと起き、「またうせたか、此の度は殺すぞ。」とぎしめく。狐、「おさわぎなさるゝな、化しにはきませぬぞ。」とて、なが／＼とねころびひたひをさすりて、「なんと隙ならひとつぬいてくりやれ。」

三 料理人のとんさく

ある手すき、くわしや看板を頼まれ、書きかゝりて司と云ふ字はたとわすれ、せつ用集など取り出し居る處へ、近所の料理人に、世話文字少し覺えたるもの來り、「是れは何を御覽なさるゝ。」と云ふ。手かき右の段物語しければ、「其の文字私覺えました、つかさと云ふ字の書きやうは、同じくと云ふ字を片身とりて、ほね付の方を用る給へ。」と云ふ。扱々相應なをしへの。

四 馬耳の東風

子曰 道不レ行と本文をよみ、聖人の何と作られて、かう遊ばしてなどと講釋あるを、門弟の供に來る奴臺所にて聞き、「聖人とは何の事。」と云ふ。儒者の僕、「扱々こゝな人は文盲な事いやる、聖人とは孔子の御事。」やつこ、「又孔子とは。」「はて古今第一の道しり。」といふ。やつこ聞いて、「何ほど孔子の道しりでも、番町に使やつて見たい、てきとまよはしやらう。」

五 番太の料簡違

何の國、何寺、本尊は誰の御作、れい寶も様々有りと、削りたてたる横板に、墨黒々と大筆にしるし、町々の門へうつてまはる。往來の人立ち寄りこぞつて是れをよむ。あまり大勢あつまりければ、番小屋より親父棒つき出で、大ぜいの中へわつて入り、「扱々いかい人だかりかな、是れ／＼いづれも見ることではない、とほらつしやい／＼。」

六 かなの讀みちがひ

かなよみそこなふ人、常政のうたひ本見て、「いかい歴々なれども、扱々あたらしい事かな、つね政はあはうさうな、それはなぜなれば、上歌の所にさればかのつねまさとはある程に。」

七 豆腐やが聞きちがへ

秋は夜長に、いづかたにも夜食くふ時分、六十にもあまるべきと思ふおやぢ、とうふ／＼と門をう

59



りありくを、小者立ち出で、「是れとうふく。」とよびかけけれども、此の親父我がよび聲に許りせいを入れて行くを、ひたとよびかけてもいらへなし。小ものはらをたて大聲あけて、「あの親父めは耳がきこえぬさうな。」とよばはるを漸う聞き付け、「いやく今夜は耳はうり切れしました、あすのばんもてまゐりませう。」

八 言ひなし様でをかしい病氣

いかにも文旨なる病家へ、いしや殿見まはれ、「なんとおやぢきしよくはいか、どれ脈見せよ。」ともみ手でか、れば、おやぢ手を出しさまに、「まだ思ふやうにもござりませぬ、是れはどうした病氣でござります。」といふ。いしや脈を考へ、「どうしても是れは血熱の故ぢや。」といはれければ、要進み出で、「扱もくおまへ様はよう脈御取りなされました、成程けつねつにきはまりました、夕も尻をまくりてねやりましたほどに。」

九 直をしてはまる商ひ

四五人打連れ、江の島それから鎌倉と心ざし、七里が濱をおどけくるひながら行けば、海面を大なる鮫一つぶらりく〜と行くを見つけ、邊なる獵舟を招き、「あの鮫取つてくれ給へ。」と云ふ。獵師聞きて、「我々はすきあひなり、隙らしき事をいふ人かな。」「いや錢を出すべし百文やらう。」「いやく〜。」

「百五十文か。」「それなら取りてもしんせう。」と、鯨の行くかたまちかく舟こぎよすれば、かのたこだけ高にのび上り、三百でもないとして沈んだ。

十 樵夫の名言

心あひの友四五人、いざなぐさみながら湯治せんとて、木賀となんいへる所へ行き、こゝかしこ遊び歩きける。向うよりきこり一人來りしを、かの男に向ひて、「此の所の東西はどうぢや。」と問へば、「東西とはなんの事でござります。」と云ふ。「いやにしひがしの事ぢや。」木こり又いふやう、「おやすい御用なれども、昔から爰もとに東西はござりませぬ。」

十一 比丘尼の心中

奴ふかくあひたるびくに云ふやう、「此の年月そちと懇にあへども、さしたる心中も見ず。」といへば、びくに、「指を切るべしや。」などいへば、「いやくそれはいらぬ物、何ぞ慥かな心中が見たい。」といへば、「さやうならば重ねて來り給へ、わしが心中を見ませう。」といへば、奴嬉しく其の日は歸り、重ねて來りて、「いざけふは心中を見ん。」といへば、びくに、「いざ心中を見せ申さん。」と、頭巾をとるを見れば、いかにも高いたうけんびたひにぬきあけたり。

十二 五兵衛が安堵

59

「やいく、こちの五兵衛はうちにをるか。」「けふは頭痛がいたしますとて、二階にふせりてをります。」「はてふしぎな事かな。」といひながら五兵衛が側に行き、「やいく。」とてゆりおこし、「先ほど桃町をとほれば、たふれもの有つて、大ぜいあつまりて見るほどに、我も立ち寄りて貌を見れば其方なり、南無三寶是れはしたり、先づ宿へ歸りせんぎせんと思ひ、大息ついてかけ歸りたり。」と語れば、五兵衛聞いてむくとおき、あいさつなしにかけだし、片時が聞桃町へ行きたふれ者を見て歸り、「だんな様氣づかひなされますな、私ではござりませぬ。」

正徳二年壬辰正月吉日

日本橋南三丁目

戸藏屋

新話笑眉 大尾

稿話鹿の子餅

木室卯雲

5/9

59

稿鹿の子餅序

山の手を飛び歩行く尻やけ猿、下町にすむ腹つぶくれ、いづれかおとしばなしをせざりける。こゝにその落ちを拾ひあつめたる帖あり、話の稿なれば、わかうの響あるをもて、鹿の子餅と題す。意味深長の旨味は、ひとつく讀んで御らんなされ、數は六百八ほどありと云々。

明和壬辰の太郎月

山 風

鹿の子餅序

稿話 鹿の子餅

○桃太郎

むかしくの桃太郎は鬼が島へ渡り、もとでいらすに多くの寶を取つて來たけな、これほど手みじかな仕事はない、しかし犬と猿ときじが供をしたとある、おれもきやつらをこまづけるがよいと、かの日本一の秬團子をこしらへ、腰につけて行く。向うの岩ばなに猿が出て居る、まづしてやつたりとうれしく、件の團子ぶらつかせ行き過ぐるを、猿よびかけ、「おまへどこへござる。」「おれかおれは鬼がしまへたからを取りにゆく。」「腰につけたは何でござる。」「是れは日本一のきびだんご。」猿うかぬ貌にて、「こいつうまくないやつだ。」

○牛と馬

「總たいけだものの中で、爪の割れた物は道が早い。犀などといふやつ、爪がわれて居るによつて、波を走る事飛んだこつた。」「ハテナ、しかし馬は爪がわれてなけれど道が早い、あれはどうしたものだ。」「あれは爪が割れて居ぬからまだ人が乗られる、あれが爪がわれて見やれ、不斷飛ぶやうで中々

59

人が乗られる物ではない。「牛はどうした物だ、彼奴は爪がわれてるれど道がおそいわ。」「あれかあれは爪が割れて居るから道があるく、あいつが爪がわれぬとだいなし、うごくこつちやない。」

○煙艸入

古代の裂にて煙艸いれを数々こしらへ、味噌を上げる者あり。望んで見ればいかにもおもしろききれあり、「まづ此のにしきはいかうけつこうなきれさうにござります、これはいつ頃のきれでござります。」「それは實盛がにしきのひた、れのきれさ。」「いかさまさうもござりませう、又この蝶のちらちら見えますは。」「それこそ曾我五郎がはん切のきれでござる。」「してまたこゝに白地のきれに赤い所のみえまするは。」「そりや牛若の大口のきれ、そのあかい所はいがきのもやうのきれたのでござる。」「さてよくおあつめなされました、どうしてかうはあつまりました。」「みんな人形屋でもらつて來ました。」

○鞠

まりにはまつた息子へ、親父遠廻しの意見、いかな事聞き入れねば、ある時よびつけ油をとりて、「九損一徳何のやくにたたぬ藝、向後ふつとりやむべし、鞠があれば蹴りたくなる、そのまりうつちやつて仕舞へ。」といふに、むすこしをくくと鞠を出し、手代をよび、「今までもてあそんだ此の鞠、無

下にすつるもあんまりぢや、せめて庭の隅をほつてうめ、しるしに柳をうるてくりや。」

○俄道心

相店の八兵衛欠落して行方しれず、程少し過ぎて兩ごく橋の上でひたと出つくはした所、ごつそり剃つた道心すがたでもゆるさず、胸ぐらひとつとらへ、「コリヤ八兵衛、坊主になつたとて、れうけんはならぬ、いつぞやの八百のかし、たつた今かへせ。」「これ坊主になつたと思つて安くするな、かうなつても心まで坊主にやならない。」

○盗人

ぬす人の用心に親父藏に寝る、それでもぬす人來て家尻をきり、まづ一人藏の内へ入れば、外の一人は持ち出す道具うけとる手筈でしやがんでるたり。時におやち目をさまし、壁に穴の明いたるは合點のかすと、件の穴よりあたまをさし出したるに、外に居るぬす人、「ム、やくわんから先か。」

○提灯

夜ばなしの歸り、みちく家來と咄しながらもどれば、家來も咄が盡きて、「もし檀那此のちやうちんはなせくさりをつけた物でござります。」「それはひよつとりふじんものが切つた時、きればなれぬ用心ぢや。」「シテそのときはだれがもちます。」

59

○浪人

雨のふる日は眞の浪人と来て、晴間まつ張肘の門口、おあまり貰ひが立つて、「おあまり下さいますか。」「浪人、くすみ返つて、「あまらぬ。」

○馬鹿娘

なんほ馬鹿でも十七なれば、もう袖をとめてやつたがよいと袖つめた日、近所のわかいしゆ来て、「こりやおむす袖とめめでたい、どりや見たい。」といへば、むすめ右の手をあぐる。「コリヤどうもいへぬ。」といふ時、娘左の手をあけ、「こつちやも。」

○薺

朝とく起きてやうじ遣ひながら、垣の透間から鄰を覗けば、寐みだれすがたの娘えんがはにこしかけ、あさがほの花をながめて居る。これはかはゆらしいと息もせずのぞき居るに、庭におりるりに咲いた一りんをちぎり、手のひらへらせて見る風情、どうもいへず、歌でも案ずるよといよくゆかしく見て居たるに、今度は葉をひとつちぎりたり、なににするぞと見て居たりや、チント鼻をかんで捨てた。

○鼻捻り

殿の御好みで出来た鼻ねぢり、御預け遊ばされたにより、かんぶくろをこしらへ、これに入れて御次の間にかけた所、白うて見とむなければ、御鼻ねぢりと書き付けたが、御鼻ねぢりでは檀那の鼻をねぢるやうなれば、書き直して鼻御ねぢり。

○鶉

うづら好ませ給ふお大名、承りつたへ、聞きにまるる者へは御料理など下され、甚だ悦ばせ給ふよし、お出入の宗匠衆を頼み、私もきつい鶉好きと申し入れて、曉おきし行た所、さすがお大名の御手の廻つた事、朝つばらからいろくのむまごと、酒たらふく下されのみくらひして居る内、チツクワイトの一聲肝をつぶして、「あれは何でござりますか。」

○御髭

御大名御髭を剃らせ給ふ時、お舌でお鼻の下や御頬べたをふくらませ給ふ。「なんとおれが髭を剃る時、したをまいてはたらかせ、ふくらませるで剃りよくはないか。」との御意。「イヤハヤ格別仕りよう御座ります。」「其の筈はおれが工夫ぢや。」

○劍術指南所

諸流劍術指南所と筆太なかんばん、人物くさき侍來りて、「何流なりとも、わたくし相應の流儀御

59

指南下され、御門弟になりました。」との口上。「其元様は、表の看板を見てお出ででござりますか。」  
「左様でござります。」ハテ埒もない、あれはぬす人の用心でござります。」

○蜜柑

分限な者の息子、照りつゞく暑さにあたり大煩ひ、なんでも食事すゝまねば、うち寄つてなにぞのぞみはないかとのくらうがり、「何にもくひたうない、そのうちひいやりとみかんなら喰ひたい。」とのこのみ。安い事と買ひにやれど、六月の事なればいかな事なし。爰に須田町にたつた一つあり、一つで千兩一文ぶつかいてもうらず、もとより大身代の事なれば、それでもよいとて千兩に買ひ、さああがれと出せば、むす子うれしがり、まくらからく起き上り、皮をむいた所が十袋あり。にこくと七袋くひ、「いやもううまうてどうもいへぬ、これはお袋様へあけてたも。」とのこる三袋手代にわたせば、手代その三ふくろをうけ取りて、みちから欠落。

○醫案

これも一人息子、餘程の日數をぶらゝわづらひ、くすりや針の験も見えねば、親父くらうがり、少し通り者を出し、心安い若いしゆをひそかにまねいて、「市之丞が病氣、引つこんで許りのやうじやうは、けつくめづらいでわるい、貴様たちは不斷も心やすいはこんな時ぢや、ちとさそうて遊び所へ

つれて行つて、氣を轉じさせて下さい。」との頼み。得手に帆とつけ合ひ、息子にあそびすゝむれど、一ふんすゝみなく、どこへも出るはいやとのあいさつ。「さうでは濟まぬ、それなら船は。」といろくにいへば、「何もかもいや、しかし芳町なら遊んで見たい氣もある。」といへば、安い事とおやぢに内々かたれば、「どこでも大じござらぬ、なれどちよつといしやどのへきいてみての事にして下さい。」と念を入れて、すぐにいしや殿へ行き、「叔市坊もおかけでよほど心よう、しよく好みができました、どうぞよし町へ遊びにまゐりたいと申しますが、どうぞござりませう。」イヤそれはちとゆるしにくい、野郎はうま過ぎてもたれる。」と不承知のてい。「然らば内にきれいな二才がござります、これを用るませうか。」「いやく地穴は毒氣がある、これもなるまい。」「それではせつかくの好みが無になります、どうぞ御料簡をなされて下されませ。」「ハテこまつた物。」と、机の上からこまかに書いた大冊の書物取り出し開き、眉に皺よせくり返し、「ハ、アあるわく。」「何でござります。」「寒ざらしのやつこのけつがよい。」

○下女

「どうだ、おさんどの久しい、どこへござる。」「けふは宿おりに出やした。」「してことはどこに居さつしやる。」「アイ、ことは下谷のもちやに居やす。」「何もち屋、そんなら大ぶもちをくふだあら

59

うの。「なあにきよねんは湯屋に居たけれども。」

○初夢

寶船敷いて寝たあした、友達へひとを廻しよびあつめ、亭主何やら大よろこびの體、神棚へみきをあぐるやら、客へは酒さかな出すやら、上を下への大さわぎ。「何でも初春早々めでたい事と見えた。」  
「どんなこつちや、俺もちつとあやかりたい、いつてきかしやれ。」  
「されば聞いてくりや、ゆうべめでたい夢をみた。」  
「何をみやつた。」  
「丸づけをみた。」  
「何丸づけを見た、丸漬がなぜめでたい。」  
「ハテ、一富士二たか南無三まぢがつた。」

○田舎者

田舎者はじめて堺町へ行き、芝居見物して歸りけるを、「けふは芝居へござつたけな、どつちへござつた。」  
「たしか勘左衛門とやら、勘三郎とやらへ行きましたが、何がやわるい日行きました、ろくだま狂言はしまうしなんだ。」  
「それはさんくで有つた。そしてどんな事がござつた。」  
「さるおもだかの鎧とやらがなくなつたとつて、一日ハイそのさわぎで仕舞ひました。」

○新五左殿

俳名なくて爲になる容と來て居るお國の御家老、たま〜家内引きつれ江戸への出府、出入の町人

芝居ふるまひ、翌日機嫌ききにまゐれば、直に居間へ通され丁寧の禮。町人は本田屋銀次郎、當世しやれのひつこぬき、「昨晚もそつと茶屋に御座なされました、奥様や尉さまへ露友が唄をきかせ申し一瓢が身もおめにかかせうとぞんじましたに、おいそぎ遊ばしまして、早うお歸り遊ばし、残念にござります、又近い内船を申し付けませう。」  
「などとくるめかければ、「否もうきのふはいかい世話、めづらしい江戸芝居見物して、皆もよろこび申す、叔あのお経になつた役者は、何といふやくしやでござる。」  
「あれは松本幸四郎でござります、せけんでの親玉々と申すでござります。」  
「何親玉とはあれが事でおじやるか、いやはやよい人品、何を云ひつけてもつとめ兼ねまい男、いかうさしはたらき、分別もあると見うけ申した、それにつけてもあの音八郎がたはけは。」

○雪隠

兵法の師匠の所へ、大水の見舞に行きてみれば、牀上へはあけず、師の坊雪隠と見えて、雪ちんにて聲有り、その聲はねるたび〜尻をひねるやうすにて、トウ〜どこ〜とのかけ聲、ト〜はつしそこなひしや、ひつしやりと尻へはねる音したれば、な無三あひうちになつた。

○小便

雪の夜中小便詰りて目さめ、起きて立ち出で、雨戸明けに掛つた所、氷りついていかな事明かず、

59



仕かたなければ敷居へかんで小便をたれかけ、扱明けて見れば氷とけてぐわらりとあいたり、よしと云ひて出た所が何の用なし。

○悔み

神道者の親父が死んだ時くやみに行き、「扱おやち様の此の間高間が原へ御出でなされましたけな、おちからおとし、申しませう様もござりませぬ。」との口上。おもしろし、おれも其の道にやらかさうと行き、「扱おちから落とし、申しませう様もござりませぬ、親父様は此中うねめが原へお出でなされましただけに御ざる。」

○屁

初會のさしき、女郎ふいとの仕事こなひ、若い者ひつかぶり、「檀那御免、出ものはれもの所きはす。」と、あたまをかけば、客もさるものにて、「ひつたものこの事か、コリヤ放屁をやり山。」と一分はずめば、ぶいではない粹さまといたゞき、「さあお牀にいたしませう。」と出て行く廊下、女郎もなにくはぬかほでつゝいて出で、うはさうりゆたかにならしてよびかけ、「八兵衛や、はたらいてやつたによ。」

○文盲

草臥のびれの字は、ふへんにりの字と覺えたやつ、書畫の咄の中へ罷り出で、「下谷和泉ばし通に居られます、唐やうとやら唐りうとやら書かれる人は、達者さうな手なれど、ひとつばもよめませぬ、いかうつやのなきたない手でござる。」それは誰でござる。「その書いた物に則ち名も書いてござつた。何さ字のぶささ。」

○戀病

戀はをなごのしやくのたね、むすめさかりの物おもひ寝、たゞではないとみてとる乳母、しめやかに問ふは、「おまへのしやくもわたしがするりやう、ちがひはあるまい、だれさんぢや、いひなされ、となりの繁さまか。」「イヤ。」「そんなら向うの文鳥様か。」「イヤ。」「してまたたれぢやえ。」娘まじめになり、「だれでもよい。」

○無筆

「物まう。」「ドレイ。」「北佐野三五右衛門御見舞申します。」「今日は旦那罷り出ましてござります。」「しからば御女關帳へしるされ、おかへりのじぶんよろしう仰せ上げられて下されませう。」「イヤ、わたくしは無筆でござります、そこもと様御自筆に、帳面へ御書きなされて下さりませ。」「拙者も無筆でござります。」「ハテ、こまつた物だナア。」客「しからば斯ういたしませう。」取次「どうなされま

59

す。」客「まるらぬぶんになされて下され。」

○海鼠腸

御さかなに今出すこのわた、料理人お風味をするとて、するくとのむところ、「やれいまおざしきへ出すのを、みんなにしては濟まぬ。」とそばからいはれ、ひき出しながら、「こいつ出這入りにうまいやつだ。」

○牽頭持

西の國の御家中品川に奢り、翌は立つて國もとへゆかる、まで、牽頭もちには一分もくれず、大かた見送りに行つたなら、いとま乞ひの時はすまれうと思ひ、四五人言ひ合はせての送り、六郷の萬年屋でも沙汰なく、駕籠にのらる、時貌を見て居れば、「皆さらばちや随分まめでるやれ。」と、駕籠の戸びつしやり立てて行く跡見送り、「誰がまめでるものだ。」

○名所知り

「わしは歌まくら修行して國々をめぐり、名所舊跡どこでも問うて見さつしやい、しらぬ所はない。」  
「それはうらやましい、そんなら問ひませう、嵯峨とやらはどんな所でござる。」  
「嵯峨というてはみやこ第一の風景、大井川とて石のながれる川もあり、むかうは金谷、こちらは島田、繪の名所でござる。」

る。「八つ橋のかきつばたは。」  
「それはなり平の晝めし喰はれたところ、花の時分はいやはや見事な事さ。」  
「よし澤のあやめは。」  
「澤中一面のあやめ、どうもいはれた所ちやござらぬ。」  
「松しまの茂平治は。」  
「是れがまた大きな禪寺ぢや。」

○試合

「先生、このあひだ試合に参つた者かござりましたけな、さだめて手ひどいめにあはせて遣はされましつら。」  
「なるほど、いやもうまだく至極未熟な劍術、立ちあはねばおくれたなどと存するがいやさに、おとなけないとおしかりでござらうなれど立ちあひました。敵しなへをふりあげ眞一もんじに打つてまるる所、さそくのはやわざは爰ぢや。」  
「どうなされました。」  
「額でうけた。」

○上り兜

ちんほうの看板たてる幟かなと、人にもいははれたむすこ、その母のろまの玉子をのむと夢見て孕みしゆゑにや、二十越えても古今のぬけ作、四月のはじめから二階へ引籠つて、何をするかしれず、五月の節前に出て来て、「先途からちつとばかり細工をいたしました、これ賣つて小遣ひ錢にでもなされませ。」と、うつくしいきれではりぬいた上りかぶと、二親も肝をつぶし、人にもふいちやうし、「日頃は足らぬやつとおもつてゐるが、大きな相違。」とほめちぎる親馬鹿、その上りかぶとも時節の

物とて早速に賣れ、思ひ寄らぬ錢まうけ、聞く人舌を振ひし。又八月のはじめから二階ごもり、今度は何が出来るとおもつて居た所、九月節前に出て来て、「先途からこしらへました物おめにかかけませう。」との事、「今度は何ぢや早う見たい。」といふに、出した所又あがりかぶと。

○炮 碌 賣

霞が關の辻番の前で、炮碌賣り仲間逢ひ、國者としてしみぐとの咄し、「さて久しうてあうたまづ貴様もまめでめでたい、時にどうぞ酒でも買つてふるまひたいが、爰はおやしきの中酒屋は遠し。」と少し案じる身ありてうなづき、はうろくを一つ手にとると、辻番から、「そこをこみにせまいぞ。」

○料理 指南所

料理指南所と看板かけて、小ぎれいな格子作り、弟子にならんと朝とく来て案内乞へば、髭むじやむじやとはえた佛頂面の男取次に出でて、「まだ休んでごんす、馬鹿々々しい早いござりやうだ、晝過ぎにごんせ。」と懷手のあしらひ。一まづかへり、八つ時分に來て案内乞へば、かのにくていなやつ、ふしようくの取りつぎ。内へ通れば亭主出で、「ようこそ御出でなされました、料理御執心で御ざらば、御相談申しあげませう。」といふに、「それは近頃 忝うござります。扱こなたのお取次は、いぢのわるさうな人、山下次郎三と來て居るにきてい、あれは御家來でござりますか。」「エ、あれか

え、あれは手前のからしかき。」

○翠 玉

槍もち角内、疝氣で翠玉の大きくなる事土塚のごとし。本道外科手を盡せども直らず、外科もとより長崎流にて、今までかゝつた事直さぬといふ事なし。是れを直さねば名代がすたる、今日は仕かたありとて見舞ひ、本道も來合はせ見て居れば、角内を庭へおろし、耳くじりぬきはなして、首中にうちおとせば、切りくちよりなぐる、血にまじり、無間の鐘の手水鉢のごとく、吹き出す水につれ、件のきん玉次第々々にちゞみ、不斷の通りになりたり。外科鼻を高くし、「なんと奇妙か。」といへば、本道感心し、「いやはやきめうく、しかしちつとあられうぢだ。」

○唐 様

唐様書きの客有りてかきちらさる、最中、鳶の者來て、「俺も一番書いて貰ひたい。」と出しやばり、「もしえわしにも一枚書いてくだんせ、つがもない、又あまくちな事はいやです、何ぞがうきな事が書いて貰ひたうごんす。」といふに、「安い事何ぞ好んだがよい、詩がよからうか語がよからうか。」といはるれば、「四の五のと小さい目は氣がごんせぬ、ちつとふさぐしいが百千萬と書いて下んせ。」「オット合點ぢや。」と筆をてんじ、百の字の横の一畫書かる、と、「イヨ、ひやの字出來やした。」

509

○薪屋

神田川出水に、筋違ひの薪ことく流れるを、柳原の乞食川端へ出て居て、鳶口にひつかけながら、薪を引きあげれば、たちまち乞食が薪屋になり、薪屋が乞食になつた。

○物知

「時頼記の序に、將軍宣下といふことが書いてある、あれはどんな事ぢや。」「あれはかの源頼朝公などが、金のゑほしを召してまんなかにござると、和田北條畠山そのほかの大名、ゑほし素袍でならび、まん中の頼朝公が將軍宣下とおつしやると、みんなが一どに、「さんけく六こんしやうく。」

○尻端折

竹之丞寺の開帳まるり、非番連の二人兩國橋わたりか、つた所、橋の中ほどで喧嘩、そりやぬいたと大騒ぎ、されども侍が来か、つて、あとへとはもどられまじ、まづするけたなりでは済まぬとかひくしく、貴様も尻をはしよつた、おれもはしよると七圖までひつからけ、脇ざしよこたへ刀はぐいとおとしざし、腕まくりにしごしらへ、「サア貴様はよしか。」「能うござる。」「よくば大橋へ廻りませう。」

○座頭

座頭晝中銭湯へ来て、「御免なされませう冷物でござります。」と呼ばはり、風呂へ這入つたところ、ふるの中には人ひとつとりも居ず、座頭しばらくして、「まづかう云つたものさ。」

○雷

けふはどうやらふりさうな空と、案じながらの暑氣見まひ、御かしらの屋敷近くへ来ると、大粒な雨ばらつき出し、門に至ればぴかりと光つて鳴り出す。雷門をかけて這入りながらの観音經、うんらいぐうせいだと唱へ、下座敷の際へ行くと、取りつきおきて手をつく。かみなりきびしく鳴るに、ごうばくちうだいうととなへながら、死身になつてひれふせば、取次聞いて、廣間の帳附の方へふりむき、「がうばく十太夫様。」

○喜勢留

客二人あり、たばこ盆一面出す、きせる壹本あり。一人の客そのきせるをとり、吹いて見るに通らず、小よりをして吸口に通し、吹けども又通らず、側の一人、「其の煙管早くよこしやれ。」といふ。「ハテせはしない。」と云ひながら、いろくして通せど通らず。側の客腹をたち、「早くよこしやれ。」とひつたくりにかゝる。「やれせはしない。」とわたさねば、亭主見かね勝手の方をのぞき、「コリヤ、たれぞあなたへも一本通らぬきせるを持つて来てあけろ。」

59

○豆腐屋

きれいな裏に豆腐屋あり、まい朝早おきして、夫婦名だいのもろかせぎ、しかるに起きた時分、一朝もかかさずに朝まつりごと、たれいふとなしぱつとした評判、ちらく覗く人もたえぬ様になりける。或朝路次口明け六ツ時分、かの朝まつりごと見に来たもの大勢おち合ひ、どやくと這入りか、つた所、おなじ裏借屋の牢人、原源右衛門用事有りて出か、り、朱鞆の大小紙子羽織、編笠手に提け人物くさく、「コリヤ、各大勢づれ何用有つて、早朝に此の裏へは這入らるゝぞ」と、小むづかしく問はれて皆々、「イヤ、ちとこの裏に見ます物がござりました、アイ参りましたで、ナウござります。」と、みんなが貌を見あはせていへば、牢人のみこみ、「ム、それかそりやもう済んだ。」

○角力場

釋迦が獄に二王堂と来ては、近年にない大入、札を買つても這入られぬ、木戸の込みあひ仕かたなければ、裏へ廻り圍を破り、犬のやうに這つて入りか、つた所、内に居る世話やき見つけ、「コリヤコリヤそこから這入る所ぢやない。」と、あたまを取つておしもどされ、得這入らず、しばらく工夫して今度は尻から這入りか、つた所、又内の世話やき見付け、「コリヤそこから出る所ぢやない。」と、帯をつかんで引きすりこんだ。

○十字

悔みにきても寄りかゝるは傾城のつね、まして無心いふ時のしなやか、偶のことなりや生返辭にもならず、のみ込んだとの安請合ひして、又、「いくらほど入る。」ときけば、「それはかほを合はせてはいはれんしん。」といふに、「そんならおれが背中へ指でかき給へ。」と、大肌ぬぎに成つて背中さし向くれば、「そんならかきんすによ。」と、まづ一字を人さし指にてしつかりとかく、「よしがつてんだ。」と、なづく所、十の字の豎の畫、ちりけの所へ指をつけると、客身をひいて、「オットそこには灸がある。」

○將棊

しやうぎといふ物人のさすに、さしてさされぬ事はない筈、さして見ようと駒をむしやうにならべやたらにさし、さてしばらくよどみ、「いかうむづかしくなつた、御手に何。」「王が二まい。」「ホ、オイヤな物の。」

○大石

裏店へ引越して来た牢人、世帯道具はさつぱりとなく、一つ竈と飯焚くはうろく一つばかり、見舞に来る者へ何もなき味噌、「總たい武士たるもの、衣類諸道具持たぬ物でござる、つね自由過ぎると、さあ軍というた時、身が倦んで困る、そこで我らはなにも持たぬです。」「それは聞えまし

59

だが、この上り口の太石は、ふみ石とも見えませぬ、何でござります。」「それか、それは寒い時もちあけるのぢや。」

○唐相撲

長崎の唐人やしきへあそびに行つた時、日本人と見ると、こくうにすまふを取りたがる、もとより好きの事なれば、取りくんだところ、何の手もなく唐人になければ、目をまはして起きあがらねば、唐人肝を潰し、人參をした、かほ、ばらせ、水をのませければ、漸う氣がつき見たりや、口にく、んだは人參、おもひもよらぬ金をまうけ、味をめてまた相撲はいやかとす、める身ぶり、唐人うれしがつて立ち合ひ、組むか組まぬにわざと負けて目を廻したふり、唐人袋から何やら出すと見えしが、こんどはした、かな灸をすゑた。

○菜うり

本所から来る菜うりに、「なんとま、の紅葉はもうよいか。」と聞けば、「ナアニ、もみぢはもう赤くなりました。」

○芳町

鳶の者はじめて野郎を買ひ、牀になり若衆に向つて、「モシ、ちつと大屋へでもあづけやせうか。」

○大錢

四文錢の通用日々に重寶、たしかに今すたつて居る大錢も、近いうちに通用するであらう、其の時は太い緒が急になくはならぬ、今からこしらへてためて設けると、ふといさしをなひ溜めるを、隣のやつ見かじり、あいつに負けずおれも儲けようと、やがて柳原へ行き、古かねの中の鑿と小刀を買ひ、ふる風ろしきにつ、んでひつしよひ、朝つばらから町中を、「錢箱の穴をひろけう。」

○借雪隠

不忍辨才天の開帳、參詣くんじゆ、此の島はむざと小便のならぬ不自由、そこを見込んで茶屋の裏をかり、かし雪隠、わけて女中方の用が足り、一人前五文つゝときはめ、おびたゞしい錢まうけ、是れよい思ひ付き、おれも借雪隠と地面の相談、女房意見して、「もはや一軒出来た跡、今建てたとはやらぬは見えてある、ひらによしにさつしやれ。」といへども聞かず、建てた日からの大入、今まではやつた隣の雪隠へは、行く人怪我に一人もなく、こつちばかりの繁昌、女房不審し、「どうしてこつちばかりへ人が來ます。」と聞けば、亭主高慢鼻に顯はれ、「なんと見たか、あれはそのはず、隣の雪隠へは一日おれが這入つて居る。」

○九郎助

鹿の子餅

59

傾城の遠い思案も遠からず、随分ぬけめのない女蕨、駒下駄鳴らし新町のいなり様へまゐり、や、一時慾心満々の願ひ事、内陣の戸帳さつとひらき、稻荷の神體あらはれ給へば、神も納受しなしたとうれしく、なんと云ひなんすと見て居れば、神體無言にしてじろりと貌を見やり給へ、前なる散錢箱ひつかへて御這入り。

○夜發蕎麥

夜發蕎麥一つ辻へ集まり、「さて總兵衛と十兵衛、米が高くて蕎麥切も合はぬ」と云うたが、夕から内へもどらぬといふ事ぢや、出奔したか、又は狐にでもばやかされてどこぞに居るか、なんにもせい可愛ゆこつた、どうでありく夜道、手／＼によんで尋ねてやらうぢやあるまいか。「いかにもそれがよからう。」と、面々箱をかついで立ちわかれ、聲はり上げて、「そばきりく。」聲慮にして、「十兵衛やそうべい。」

○藥罐

やくわんながれて釜山海の港へ寄る。唐人見つけ、替つた物がながれて来たと取り揚げ、大勢よつて、「是れはまあ何であらう。」と評議まち／＼、中でも智慧のあるやつがいふは、「これはどうしても日本の道具ぢや、その中にもこのかつかうおほかた兜であらう、それにちがひはあるまい。」といふに、

側から、「かぶとにしては口が附いてある、しかも長く附いて居る、是れはまたどうした物ぢや。」との不審、「ハテさてしれた事、これをかぶると耳がふさがる、その時脇から物をいふその口さ。」「なるほどそれでよめた、しかしそんなら兩方にありさうなもの、こつちらにはない、こりやどうであらう。」  
「それもしれた事、寝ころぶ方さ。」

○伊勢物語

母親仁にむかひ、「おはなもよほど手があがりました、もう百人一首でもござらぬ、ちと伊勢物語でもよませたらようござらう。」親仁うなづき、「なるほどそれよからう、どうで伊勢へはまるられず。」

○通小町

或お公家さまの御姫様に、おもひ／＼の文つけたれば、今宵より百夜通うて、夜ごとにかようたるし、車の櫛にきずつけよ、百夜過ぎなば、かならず逢はんと返事うれしく、雨のふる夜も風の夜も、かよひ／＼て九十九夜め、車の櫛へきすをつけ、立ち歸らんとせし所へ、こしもと出でて袖をひかへ、「お姫様のおつしやりまする、おかよひなされて九十九夜、一夜ばかりはまけにしてあけませうほどに、わたくしにつれまして、お寝聞へすぐにまるれとの事。」といへば、この男たゞいやはやくとのしりごみ、「ナゼそのやうに仰しやります。」といへば、「アイ、わたくしは日雇でござります。」

59

○朝鮮人

朝鮮人歸國の時、友だちが取り巻いて、「なんと日本ではさぞめづらしい事があるたらう、まづ何が其の内にもかはつた事ぢやぞ。」と問ふに、「いやはや何もかも珍らし事ばかりで有つた、中にも珍らしいは、鞠といふ物がある、これけだものぢや、まづ庭へ垣を拵へ、その垣の内へ人が四人這入ると、かの鞠めが出て、無性に人の足へ喰ひつく所を、食ひ付かれまいと蹴とばすと、又向うの者の足へ食ひ付く、爰でも蹴る、かくする事暫く有つて、どうした拍子やら中の一人が足許へ來る所、はづして踏み殺したりや、屁をひつて死んだ。」

○比丘尼

足輕の心和ぐ前句附、その前句より比丘尼には目が細うなつて、菖蒲草染をぐすとぬぎかへ、ぬつと二階へあがり、まてど暮せど敵の來ぬに退屈し、呼ばんとせしが、名を聞かねば名を呼ばれず、様とはいんぎんなり、殿ではかたし、坊主あたまからおもひつき、二階より覗いて、「はやう來たまへびくに老。」

○押込

押込ども相談して、「とかく小さい所はよい仕事にならず。」と、越後屋へ這入るにきはめ、人にきす

附けては、吳ふく物などよごれてはせにならず、兎角此の方大ぜいで手はずをよくし、出るほどのやつ縛り、猿轡をはめ柱へく、しつけ、扱心次第にごふく物持ち出すべしとて這入つた所、ソリヤおしこみといふよりかけて出る手代、判とり、下男、出るも縛り、出るもしばり、片はし猿ぐつわをはめ、柱へく、しけるに、又跡からも出る、しばれば出る、どうもしばりつくされず、そのうちに夜が明けて烏がかあく。

○小鼓

息子の小つゞみ、親父以ての外立腹、友達へ逢うても其の小言、友だちも氣のどくがり、「いやそこのやうにおつしやりますな、主のつゞみはいかう器用で、それしやも我を折ります、まづちとあの音をおききなされ。」と、むすこをよび出し、「さあく、何ぞみじかい事、おやち様におきかせ申したい、早うはじめ給へ。」といふに、鼓とりあけ調べた音色、いか様の妙音、親父も肝をつぶし見て居れば、息子鼓を肩よりおろし、其のかはへくひさき紙をして張らんとする時、親父、「一まいではれ、一まいで張れ。」

○野等息子

いがみの權と來て居る息子、夜更けてかへり、火もきえてまつくらやみ、親父のあたまに蹴つまづ

59



き、「ハア勿體ない。」といふ聲、母聞きつけ、「コレおやぢどの、こちのむすこも、ろが直つたか、こなたのあたまにけつまづき、もつたないといひました。」息子聞いて、「ナアニおれはめしつぎかとおもつた。」

○糞

古人の糞を集める奴あり、執心の客來つて一覽を乞ふ。亭主よろこびて、香箱やうの物いくらともなく取り出し見するに、一つくに見て、「扱々おどろき入りました、珍らしい糞どもでござります、せつ者もし久しう好きまして、大概は目ききもいたしまする、ちとあてて見ませうか。」といへば、「それはたのもしい義で御座ります、せつ者も修行の爲、いざお目ききを承りましたい。」先づ此の糞は時代凡そ六七百年、併し勇ある大將のくそ、しかし旅に苦しんだ相がござれば、大かた源のよしつねの糞でござらうやとぞんじます。「なるほど義經のくそ、御目ききいやはや神のごとくでござります。」扱このくそは、侍かとぞんずれば坊主くさい所も見え、是れもつはものくそ、時代もよし經と同時代と見えますれば、これはもし武藏坊辨慶が糞ではござりませぬか。「辨慶で御座ります、御巧者の程感心いたしました、いざくとももの事其次も承りましたい。」ハ、ア、これはむづかしい、ちとしれかねます。「それは此方でもいろく吟味いたしまするがしれませぬ。」

やしれぬと申す事はないはず、これも辨慶と同じ事で、出家と武士とのひりませに見えまするが、いかう位が有つてうづ高うござります、少し削つて見ましても苦しうござりますまいかな。「そつとも苦しうござりませぬ、おけづりなされませ。」然らば。「削り、扱こそしれました、是れは最明寺の糞でござります。」してまたそれは何でしれました。「ハテ、削つた所にちらく粟が見えます。」

下司咄屎果以舌語、先此卷是切。

稿話 鹿の子餅終

54  
9

54  
9

壽  
々  
葉  
羅  
井

志

丈

54  
9

壽々葉羅井序

年々歳々花相同じ。歳々年々人同じからずといへども、人壽百歳といへば、兔角古きにしくべからずと、茶話のかびをうち拂つて、新春の御笑ひ艸ともならんかすと、記憶の任に書きちらし、壽々葉羅井と題するのみ。

于時安永八亥はつ春

戲撰者志丈

壽々葉羅井序

59  
壽々葉羅井

女中の代参

吉原の女郎、善光寺の開帳へ代参に、かぶろを一人まるらせけるに、参詣して歸り、「アイまるつて参りました。」「オ、よくいつてきてくれたの。そして如來さんはどんなだよ。」「アイ立つておいでなりました、わたしとあのみどりどんのやうに、兩方に二人ついてるさんした。」「そしてお客は。」「アイお客さんは、三布圍で寐てござんした。」

あんけら

若いもの二三人連にて、茅場町の薬師へ参り、歸りに植木店の方へまはり見まはるうちに、何かつひに見ぬうつくしき草花あるゆゑ、「植木屋どんあの花ア何といふ花だね。」「アイあれかえ、ありやアこんげら草と云ひやす。」「こちらのは。」「あんげら草さ。」「ハアめづらしい、長坊買っていかうぢやアねえか。いくらだね。」「アイ千二百兩でございます。」「なに千二百兩だと、途方もねえ此の男ア。人を馬鹿にするか、直段をいふも程が有るもんだ、あんまりな事をいふ。」「ア、ヤ、そんなやつ

さもつさは、そつちでさつしやい。」

開帳

廻向院の佛たち、みなく寄りあつまり、ねじやかにいひけるは、「コレ貴様ふだん寐てばかりるが、これ程のはやる開帳に、さう寐てゐてはつまるまい、ちとおき給へ。」「オ、サおれも起きようとおもふけれど。」「コレサおもふけれどではない、ドレおこしてやらう。」と、よつてたかつて無理に引き起しければ、義太夫ふし。

赤貝

あか貝を買ひ水を入れ置きたれば、さも心地よけに貝を開きたるを見て、亭主何と思ひけるにや、中指をぬつと入れたれば、赤貝腹立ち指をしつかりはさみて、如何にすれども一向はなさず、見る内に指はすさまじくはれ、痛さ堪へがたく、外科醫者を呼び寄せ見せければ、醫者しかつべらしく、「まだのびでお仕合。」

女郎の嘸

吉原の女郎うち寄り、地色容色のうはさ取りくくなる中に、「もしえ花まちさんえ、おまへ年が明けなんしたら、二曉さんの所へ行きなんすかえ。」「イ、エ吉さんのところへ行きいす。」「おまへ吉さん

の所へお出でなんすと、飯をたかねばならぬが、おまへ飯のたきやう知つてゐなんすかえ。」「アイ飯を焚くにはね、アノ一升たくには、ひしやくを一本立てやす。」「そして二升たくにはえ。」「アイ二本立てやす。」

役者の女房

芝居の詰役者の女房打ちより、夫の歸りを待ち、四方山の嘸の所へ、同じ仲間何某、役を仕舞ひて歸りたれば、中島何某が女房、目ばやく見て、「權右衛門様お早うござんす、わたしが内はどうしやしたえ。」「アイたつた今、くびをきられさしつた。」「ハアそんならお汁をあた、めやせう。」

質屋の後家

ある人質屋へはり形を持ち行き、一分借りたいと番頭をさましくどけども、さらに聞き入れず、雙方もの云ひこわ高なるによつて、後家おより立ち出で、「あなたもよくくの事なればこそ、あれほどにおつしやるに、壹分貸してあけられよ。」といへば、番頭ふしようくくに、一分貸したり。先の人歸りし跡にて、番頭はり形を見て涙を流し、「ツエ檀那が生きてござれば、五百がもの外ない。」

奴のなま酔ひ

護持院の原で、なまゑひの奴が、竹光をふり廻し、殊の外あばれたり。折ふし近所にある夜鷹こ

59

れを見れば、我が馴染の男なれば、ハット驚きかけ寄つて、うしろよりすがり付き、「これ折介さん、爰であればはおまへのためにならぬ、爰を何處だと思はしやんす、惡所だによ。」

鹿相者

鹿相なる主人丁稚を使にやりしが、歸りおそきゆゑ殊の外怒り、今や〜と待つ所へ、丁稚のろりと歸り、内へ入るや入らずに、「ヤイおのれは何處へ行つても、直には歸りをらぬ、ぶちのめすぞ。早く横町へ使に行きをらう、にくいやつ。」と、むしやうに叱られ、丁稚きもをつぶし、横町へ驅け出でしが、先の名も口上も聞かず、是非なく一目散に内へ驅け戻り、「アイ檀那樣、横町へいつて参りました。」檀那「大儀々々。」

人相見

さる人人相見の方へ行き、我が相見て下されと百銅の包を出せば、相見つく〜と顔を見て、「貴様は明日八ツ時限りの命なり。」といへば、大きに驚き、早々内へ驅け戻り明日限りのいのちなれば、何にもいらすと諸道具疊まで賣り拂ひ、時計を買ひ求めて翌日早朝より時計を仕かけ、六ツ五ツ四ツと九ツ時も過ぎれば、もはや一時の命と、目もはなさず時計を見て居れば、ほどなく八ツのかしらをちやんと打ツと、もうかなはぬと尻引つからけ、何處ともなく驅落。

✓ 女のはだか参り

若い衆集まり咄の中へ、友達にこ〜として来り、「今珍らしい飛んだものを見た。」といふ。皆々、「如何なるものぞ。」と問へば、「十八九の女のはだか参り、からだの白き事雪のごとく、小股の切れ上ツたるが、ふんどしもせず、額際に少し。」といふ時、皆々きりやうは〜といはれて、「ハア顔は見なんだ。」

盗人

いたつて貧乏なる一人者の内へ盗人はひり、火をとほして、そこらを見れども何もなし。切角這入つて其の分にもなるまじ、せめて鍋でも持ち歸らんと見れば、はうろくばかり。餘りの事にあきれはてたれば、亭主は天徳寺をかぶり、寐たふりして居たれども、餘り可笑しさくす〜とふき出せば、盗人「くそ、わらひ事ぢやアない。」

借錢

友達の方へ錢五百文の無心に行く。「なる程貸しはかさうが、明晩は是非々々なければ、我ら甚だ大難儀になる、急度返すならば。」と議定して借したり。さて翌日晚になりても返さず、是非なく催促に行き、「昨日の錢は外よりあづかり物にて、今宵先へ返さねば、我らいひ譯に、首でもく、らさばなら

59

ず。」といへば、借主「マアさうでもして、間に合はせてください。」

浪人者

永々の浪人尾羽打ちからし、外へ出る事もならず、雪隠へ行きたき事こらへがたく、是非なくはだか身に鎧を着て雪隠に居たり。折ふし子供何心なく雪隠の戸をぐわらりと明け、早々驅け戻り、「みんな来いエ、祭がうんこしてゐる。」

勘器奉行

去るお屋鋪方かんりやく奉行を召し抱へ給ひ、此の奉行さまの事に心を付け工夫して、「當時御治世に多くの槍を御所持なさる、儀は、御無用にて御座候。只今にも軍起りますれば、竹槍をこしらへまする、第一常の槍は柄を切り折られては、あとが役にたちませぬ、竹槍は切られても、遣はれまする、段々切られて手元までまゐりますれば、それをためおきて、伊勢町へ遣はしまする。」

どら息子

だうらく息子、親父の前にて袖より頭巾を落したれば、親父早速取りあげ見れば、黒縮緬の両面、やまもしころもたつぶりとして、銀のこはぜ懸け、「扱々おのれはにつくいやつ、此のやうな頭巾は中安錢では買はれぬ、どこの金で買ひをつた。」「イエ、買ひはいたしませぬ、拾ひました。」「何だ

拾つた、ハテ今はよくして拾はせる。」

雷ぎりらひ

至つて雷ぎりらひのきおひ、ぶら／＼と涼みにでたれば、俄に空かきくもり、いな光すさまじく、くわらく／＼ひしやく／＼と、今にも落ちかゝるやうになりわたれば、きおひ眞青くなり、遁けたいにも遁けられず、大道へあふのけにふんぞりかへり、天を睨めて、「どうでもしやあがれ。」

桃太郎

桃太郎鬼が島へ行かんと、腰に黍團子を付け出かけたれば、犬と雉子たちいで、「何方へ行き給ふ。」といへば、「鬼が島へ寶を取りに。」「腰に付けたるは何ぞ。」「日本の黍團子。」「一つ下さい、おとも申さう。」それより兩人を供に連れ、すた／＼行く向うより、猿立ち出で、「桃太郎さん、何處へいきねんす、おまへの腰のは何でえす。」「日本の黍團子。」「一つくんねんし。」としやれるに、定めて猿も如才はあるまじと、一つやれば、「ア、うまい、も一つくんねんし。」と、是れをも喰つて、「ア、うまかつた、何時でも來ねんし。」

げぢ

大内の紫宸殿へげぢ／＼出でたれば、公家衆もつてのほか騒ぎ給ふ。一人の公家衆、鼻紙にてそつ

59

とつまみて、築地の外へ打ちすて、「をと、ひ参内。」

浪人の鏢刀

臆病なる浪人者の内へ、盗人入らんとせしを、浪人はやく聞きつけ、刀をぬいておどさんと、すらりとぬいて、くらやみをふりまはせども、赤鯰にてねつから光らず、せう事なしにうちで、ひかくひかくとふりまはせば、連の盗人あとより來り、「何故早くはひらぬ。」といへば、「待ちやれ、内で脇差の聲色をつかふ。」

大一座

吉原大一座の中にて、新造屁を放つたれば、お職女郎大きに腹立ち、殊の外しかれば、容みなく、氣の毒がり、「出ものはれもの少しもくるしからず、大名衆のお姫さまでも有ること。」と、まぎらせども、姉女郎さらに聞き入れず、「イエ／＼あのやうな事は癖になり、わたくしまで顔が立ちいせん、ないしよ／＼言つて、急度仕置をせねばなりいせん、下へいきな。」といへども、新造顔をあかめてたちかねれば、「下へいきなといふに。」といひながら、手前がぶう、「おれも跡から行く。」

煙管の鷹首

ある人煙草を喫み、鷹首下へうつむきたれば、そばの人氣を付け、「もし／＼膝へ吹きながら落ちま

せう。」といへば、「イエ／＼かやうに致してたべますれば、どちらからも風があたりませず、ゆるにたばこが何程もいりませぬ。」ハテそれはよいおもひつき、おれにも一本買つて下さい。」

だうらく指南所

だうらく指南所へ米屋の息子來りて、御弟子になりたきと師匠に近づきになり、「一つ二つ話のうへにて、師匠息子に向ひ、「叔當年は肝腎の時分いかう雨が降りましたが、米の相場は何ほどでござる。」息子「ハイ、サレバ一向存じませぬ。」師匠「ハツアよほどお下地がある。」

晦日

任俠家主へ行き、「もしえ大屋さんえ、アノ晦日の事をつもごりといふは、どうしたわけでございすね。」「あれは、つもがごるゆるに、つもごりというたものぢや。」「ハアそんなら、つももごるものぢやございますかね。」「ハテごらいでわさ。」

きおひ

きおひ寄合の歸りに二三人連にて、深川へあそびに行き、茶屋の二階へあがると、すつと牀の間へあがれば、連のもの氣の毒がり、「これ／＼あんまりしやれるなく、今に女郎があがるわ。」「ナアニ吉原ぢやアあるまいし。」

59



いんぎん

仕事師二人連にて、丁場へ出がけに、「ちつと待ちやれ、おらア此處の檀那衆へ、昨日の禮をいはねばならぬ。」と見世へ立ち寄り、「番頭さん、昨日は御馳走になりやして有りがたうございやす。檀那さんへもよろしうおたのみ申しやす。」と禮儀を述べ、サア行かうといへば、「おのしやア檀那衆の所で、何故あのやうにわうへいにいふ。」といはれて、「昨日といふよりもづつと慇懃にはどういふ。」「ハテ一昨日とさ。」

貧乏人

近所へふるまひに呼ばれけるが、至つて貧乏人にて著物に困りて、是非なく縮入羽織を著て、其上裕羽織を著て、袴を著て行けり。杯本膳も相すみ、是れよりみなく不禮講々々と袴を取れども、「私はこれが勝手でござる。」といへども、皆々合點せず、大勢寄つてたかつて無理やりに袴を取りて、「ハテきつい御成人。」

禿

吉原のかむろ病氣にて、皆々殊の外不便利がり、末期に及びし時、人々うち寄り、「何にても思ひおく事あらば申すべし。」といへば、「私や、死んだら神になりたうござんす。」との遺言にまかせ、禿稻荷大

明神と付けたり。人々まうでて神前にて拍手をしやんくくと拍てば、宮のうちにて、「アイ引。」

干鯛

百姓江戸の御地頭様より干鯛を拜領し、國へもつて歸りけれども、何といふものか見知りたる人もなければ、菩提所の和尚へ見せれば、「それは田舎にていらぬものなり。」というて、何とも名をいはずれば、百姓うちより、「これは何になるものでござる。」といへば、中に年寄が、「これは江戸にある恵比須さまの脇差だ。」

富士の裾野

若いしゆ寄り、はなしの中へ六十許りの親父來りければ、「ア、これく、今時分昔の噺は耳に入らぬ。」といへば、「ア、そんならば歸りませう、扱々浮世はさまくぢや、兄は斬らるゝ、弟はしばらるる。」「ア、もしく、祖父さんそれはどこでく。」「富士の巻狩で。」

竹田料理

竹田御料理といふ看板を見て、「三三人連にて來り、膳を見れば、茶漬ばかりに平二つなり。如何なるものかと平の蓋を取つて見れば、ぜんまい。

刀のそり

59

老人と若き侍二人連にて、兩國橋を通りたれば、若き侍かたなのそりうちたるを知らずしてゐるを、老人氣を附け、「何故そりを打ちて、さされしぞ。」といへば、「ハ、ア風で。」

大食

大食をする人餘りすさまじく食ふ故に、そばにゐる人はなはだ氣の毒に思ひ、「貴様それを喰つたならば、今に腹が裂けるであらうぞ。」といふ内、腹ではつちりと音がすれば、「そりやこそ。」と懐を見れば、越中ふんどのしの紐が切れた。

なががたな

上州に名代の長き刀をさす人あるよしにて、わざ／＼近國より見物に來り尋ねあたりて、「我々は長き刀を拜見いたしたく、わざ／＼参り候。」よしいへば、女房たち出で、「これは／＼折角の御出でなれども、昨日江戸へまゐられました、今少し早く御出でなされば、今までそこに鎧がまだござりませんでした。」

✓か つ ぱ

やかた船へ堺町のかげま子ども出でしが、俄に雪隠へ行きたくなり、せうことなしに、とものかたより川へ尻をむけるたれば、折節川太郎むすこをいできて來りしが、息子かつぱかけまの尻を見つけた。

開帳の上物

て、「アレとつさんや、あつこにうまいが／＼。」とねだれば、おやぢしかつて、「アリヤア賣物だ。」  
吉原の女郎、客に、「申しエ、おまいにね御無心がありません。」「何だ。」「こんど善光寺の如來さんのお開帳がありんすによつて、何ぞあけたいものでおさんすが、お前こしらへておくんなし。」「ム、こしらへてやらうともく、何がよからうの、ちやうちんか、但しのほりか、イヤ／＼錦の御戸帳がよからう。」「ナアに、なんほ如來さんでも、あの相撲取ではあるまいし。」

物しり

「これ貴様は何も彼もものしりだが、日本の鶯はほうほけきやうとなくが、唐の鶯は何となきます。」「ハテ知れた事を聞く人だ。」「それでもわしは知らぬ。」「ハテ扱子の曰く。」

は つ 茸

「わしがるなかの山には、とんだ大きなはつ茸が出るて。」「どのくらゐござる。」「先づ大かたひらいた所が、さしわたしで、五六尺もあらう。」「とんだてつぼうをいふ人だ、そのやうなはつ茸があるものか。」「イヤうそでない事、雨の降る時は、からかさのかかりにする。」

浪人の自慢

59

「扱わしが先祖は、楠の家臣にしのづか五郎というては名高いものだ、度々てがらもあつた。其の後石橋山の戦ひに石なけの手から、又朝鮮攻にも虎狩で、手がらをしました。」ア、申し、それは大分時代も人も違ひました。「さればさ、その間違で浪人いたした。」

論語

仕事師日本橋にて仲間ゆきあひ、「八え、おのしやア何處へいく。」オ、おらア出雲寺へ論語を買ひにいくわ。「何だ論語を、いけねえやつぢやアねえか、わりやア論語を讀みえるか。」べらほうめ、人を安くしやがる、讀まねえでどうするものだ。「そんなら始めの所を讀んで見ろ。」合點だ、商賣往來。」

紙帳

殊の外ちかくに火事あれば、亭主紙帳を釣り、ことごとく諸道具をその紙帳の中へ入れければ、女房氣の毒がり、「おまへその紙帳は何のために釣る事ぞ、此の急な火事に。」といへば、「やかまし、だまつてゐろ、火事に土藏と見せるのだ。」

ばちびん

深川にて客人、藝者屋の三味線を枕にして高敷にて寐たれば、不思議や、この三味線おのれと音をいだすゆる、客人を見れば、前後も知らず、これは奇妙とあたまを見ればばちびん。

遠國者

遠國の人浅草の御見附の御番所へ罷り出で、「私は遠國者でござりますが、何卒江戸の女郎と申すものを買ひまして、古郷への咄の種にいたしたうござります、何とぞ仰せ付けられて下されませう。」と願へば、役人聞き給ひ、「勝手に知らねば、尤もの事なり、此方より下番を案内に遣はすべし。」とのたまへば、「有りがたうござります。」と浅草の方へ行くを呼びかへして、「コリヤ、びくにんを買はば、寺社へ届ける。」

馬士

師走大根をつけたる在郷馬、度々小便をするを、馬かた殊の外こゝろせき、「此畜生めは、よく度々小便して、日のみじかに待たせをるわえ、ちつと歩きながらしやあがれ。」といへば、馬「馬鹿な、馬士ぢやアあるまいし。」

鉢の木

至つて鉢の木を好く人のもとへ、小賢しけなる人ゆきて、それかこれかと眺めるを、亭主内より立ち出で、「貴公さまにも鉢の木をお好きめさるゝと見えまして、御頼もしい。」といへば、「されば、」

59

私も殊の外好物でござるゆる、大概は見覚えてをりますが、これは何でござる。「それは佛手柑。」  
「へエ、薬になりますのか。」「是れは何。」「それは唐のくわりん。」「へエ、三味線の胴になりますのか。」「是れはなに。」「それはちんちやうぎ。」「ハ、アそろばんになるものか。」

疱瘡

ひとり息子疱瘡最中の所へ、きやん遊びに来たれば、親父「八や坊主めが疱瘡するから、ちつと靜かにしてくりやれ。」「何だ疱瘡、ねつから知らなんだ。疱瘡には龜の子が、飛んだ妙薬の、早く喰はせやれ、おれが取つて来てやらう。」と、直に取つて来てこしらへ、「サア喰はしやれ。」といへば、親父も如何とは思ひながら、こゝろざしもだし難く、一口喰はせれば、七顛八倒して、たちまち死んだ。兩親はなはだ歎きければ、「此の龜の子めは太い奴ぢやあねえかえ、萬年過ぎたら過ぎたといやあがればよい。」

新宅

盗人晩に入らんと思ふには、方々を晝の内見廻りて、勝手能き所へ入るなり。こゝに新宅の奥を見れば、唐木の牀違ひ棚、こちらには蠟色の箆笥、長持用箆笥、何でも晩にはせしめてくれんと、夜になるを待てば、程なく其の夜丑みつ頃、まんまと忍び入り、くらやみにて探して見ても何もなし。

扱は外へ預けたるか、たしか此處らが牀の間と探つて見ても、腰張ばかり、これは奇妙と火をうち付けよく見れば、ことごとく繪に書いたり。盗人あきれて、「扱も太い奴だ。」

鯉の瀧登り

隅田川より御献上の鯉を納めんと兩國橋を通りしが、此の鯉飛び出で川へ入りたり。持人うろたへ立ちさわけば、冷水賣これを見て、「いかなる事。」と尋ねれば、持人始終を咄し、涙を流せば、「少しも氣遣ひ有るな、おれが取つて進上。」と、欄干の上より、ひや水をさら〜とこほしながら、「瀧々瀧。」

むらさき

若いもの四五人集まり話してゐる所へ、又一人友達來り、「これ〜珍らしい木を見て來た。」「何だどんな木だ。」「木もむらさき、葉もむらさき、花もむらさき、實もむらさきの木だ。」ム、そりやア珍らしい木だ。「何といふ木だ。」「何とか名はいつたつけど忘れた、いつて聞いてこよう。」と驅け出ししばらくして來り、「聞いてきた〜。」「何といふ木だ。」「なすび。」

使

一王善光寺へ使に行つてもどり、佛頂面をしてゐるゆる、觀音「どうぢや、口上のおもむき申した

59

か。」と聞き給へば、「い、え釋迦が寐てるて挨拶をいたしたから、業が煮えて戻りました。」といへば、  
觀音「おほかたそちも立つてるたらう。」

かけあらし

「何と善光は坊主か撫附か、おのしやあ知るめえ。」「オ、知らねえ事は無い、撫附に違ひはない。」と  
あらしひ、「そんなら何でもかけにしよう。」と二人して、開帳場へ行き、和尚に願ひてかむりを取つて  
見れば、本田。

時花うた

女郎客に向ひ、「おめへに無心がありんすが、たび／＼の事でいひにくうありんすから、はやりうた  
でまうしいせう。」といへば、客「それはめづらし、承りたい。」女郎歌「つまりてつまりて二つの願ひ。」  
客「してやんして、どうしたの。」女郎「夜著は錦であんまり、是れでは好みが強いが、なんかまくら。」  
客「おうさ、みんなそつちでせい。」女郎舌をたし「へんてこく、へんしはんほさんかいな。」客「おいなお  
いな。」

鬼むすめ

生酔よろ／＼して鬼娘を見ようとするゆる、木戸番「若しおまへはよつほど御機嫌さうだ、あぶな  
うござりますから、よしになされませ、酔ひが醒めてからおいでなされまし。」「い、やおりやもう酔  
ひが醒めた、見せてくれ給へ。」木戸「酔ひが醒めたらおはひりなされてごらうじませ。」といへば、  
うちから鬼娘が「酔ひが醒めたら、わしや嫌ぢや／＼。」といふ。「何故嫌がる。」といへば、鬼娘「酔ひが  
醒めると、しよきになります。」

ねじやか

若いもの寄り合ひ、「此度の開帳は近年にない大あたりだ、何とあの寐釋迦でも盗んで、錢まうけし  
ようぢやあるめえか。」「こりやよからう。」と大勢にて盗みだし、ひつかついで寺町まで来りしが、い  
つかないつかない動かねば、「こりやアいかぬ代物。」と寺前へうち捨てて歸りしま、兩寺より和尚立ち  
合ひよく／＼見れば、善光寺の伴頭なれば、互に我が代物に「御くしがこちらにごされば、この方へ  
引きとりませう。」といへば、淨土宗「イヤこの方へ引き取りませう。其の仔細はね佛でござる。」と辯  
舌に任せつめかくれば、日蓮宗の和尚「はてさやう仰せられな、今にお經。」

座頭

座頭開帳へ参り御印文の入口へ行けば、「おつと如來はそつちだ。」と、棒の先で額をつけば、座頭、  
「おつとありがた山。」と内へかへり、世の定業是非もなくつい頓死して、閻魔大王の御前へ引かれ、

59

「私をば御印文をいたゞいて参りましたから、おうたがひなく極樂へお通し下されまし。」といへば  
閻魔大の眼をひらき、「どれく吟味せん。」とあらため給ひ「ならぬく。」といふゆゑ、座頭「何故で  
さいりします。」といへば、「ほう判だ。」

どろばう

盗人御印文をいたゞきに行きて、錢百文投げ出し、尻をまくつて、「此處へおたのみ申します。」とい  
へば、坊主あきれて、「これは勿體ない、御印文を尻へおすとは、そなた氣がちがつたか、何故額へい  
たゞかぬ。」といへば、「いえく首はあすないもの。」

地藏

湯島の開帳にて、子供を地藏へ年季奉公に出すゆゑ、近所の若いもの、「もしお地藏さん、おまへさ  
んは子供を大分奉公人におか、へなされます。あれはまあだんくと年が明けたら、どうなされま  
す。」地藏「あれは女郎やかけまに賣つてやる。」

佛のむしん

京の大佛、夜を日についで、江戸の廻向院の開帳へ來り給ひ、「さてくわれら甚だ困窮に及びしゆ  
ゑ、貴公へ御無心にまるつた。先づそこもとはたつた一寸八分の身で、大金をまうけ給ふ、われらは

此のやうな世間はつれの大きなからだでも、一向金まうけが出来ぬ。ついてはよんどころない入用の  
事が出来てまるつたが、何卒貴公の此の一日の賽錢を借用申したいが、何と貸しては下さるまいか。」  
「なるほど、京都から此處までござつておつしやるほどの事、よくくのことと存する、一日の賽錢  
位は御用立てませう。」と、かますに入れたる賽錢を出せば、「これはかたじけない。」と、前巾著へ入れ  
る。

59

~~58~~  
9

漸落  
無事  
志有意

烏  
亭  
焉  
馬

無事志有意序

庭増ニ氣色ニ晴沙緑、林變容輝宿雪紅といへり、草木も春を迎へて長閑なる折から、吉例の嘯初めの三立目、氣樂と聲をかけたは何やつだヤイ。

牛島の方よ 氣が樂きがらくきがらぶう。

當時なんでも大ひまあけ、ほくてきせけんをはからず、天地乾坤の其のあひだに、苦勞はちつともない田の不動に五代のこういん、七左衛門といふしんまいいんきよ、當年正月二十一日なんとみな様まださむいぢやござりませぬか、かじけはもとより御存じの、納豆をほしをぬぎすて、黒い頭巾にねずみの胴服、あかざの杖に高あしだ、高はおやぢがゆつりの鼻、はなが見たくば秋葉へござれ。はるはあきばの花盛り、年々歳々花あひくち、焉馬がはなしをするならば、七左衛門が聞かうとは、河豚に大こん鴨に葱、市が榮える下津町、祖父は山の手、祖母は川端、橋々に咄の評判、四里四方聞くべい、見るべい、はなすべい、庚申まちに白猿が、三筋たらねえ序のせり譜、福茶にうかれた戲言と、ホ、うやまつて坊主にはなりませぬ。

59



幾千世も葉なしにしけれ梅の花

樽計入道先肝癩團十大盡白猿述

嗒落無事志有意

立川談洲樓焉馬撰

○歳且若水

談州樓作

春は曙やうくしろくなりゆく、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲の細くたなびきたると、清女のかかれしもむべなるかな。一夜明くればかけ乞ひの、つれなく見えし別れより、曉がたは扇々寶舟々と賣聲に、裏住居のひとりものも目をさまし、若水汲まんと手桶さけて井戸ばたにいたれば、とくにもおきて釣瓶ながら水をあびて居る者有り、「だれだ福藏か。」「ム、徳右衛門か、いい春だな。」「オ、サしい春だな、いつもけんきだ、はやくおきたな。」「何さゆうべから、親かたのかけとりの供にいつて、今かへつたから、すぐに水をあびるわ。去年の春もあびたら、一年中風もひかねえ、おのしもあびやれ。」「ム、おれもあびべい。」とはだかになり、あたまからざつぶり。「オ、ひやつこい。」といふ所へ、十五六な娘が手桶をさけて来て、「オヤ、ふたりながら水をあびてさ、一寸つるべをかしておくれ。」「おとみさんか、とつさんはどうした。」「とつさんは福壽草を賣りに。」「さう

59

さう錢まうけだの、あぶないおれがくんでやらう。」と、手桶へ一ぱい。其の跡へ長屋の女房二三人、「サアいい所へ来た、おいらにもくんでくんな。」と、面々たのんで汲んでもらふところへ、一人ずみのどうしん者のば、あが手桶をさけて、「オ、いい所へ来やした。どうぞ一ツばいおくれ。」といへば、顔を見て、「おいらはもう恵方参りに行くから、たれぞにたのみな。」「コレそんなにいひなさるな、娘や若いかみ様たちには汲んでやつて、さうはしないもの。」といはれて、「てめへくんでやれ。」「エ、おらあ著物を著た。」といひながら、ふしようく井戸をのぞいて、「おやすい事だがあればいいが。」

○春興神遊び

松友長綱作

えびす大黒、初卯参りより梅やしきへ行かんと、福神仲間をさそひに行く。壽老人は福祿壽と二人こたつにあたつて、「けふはよしにせう。」といふ。布袋はどぶつであるくはごめん、そんならびしやもんと辨天、是れで面白からうとむだをいひながら野道を行く。龜井戸の玉やへあがり、「めづらしく蜆のすひ物、外になんぞ呑めるものを出してくれ。」とあつらへ、出来る内たばこをのんでゐる。大こく、「コレえびす、貴様のたばこは匂ひが能いが何ぢや。」「おれはきついのがすきぢやによつて、まひをのみます。」「ム、えびすまひぢやな、おれも大黒まひをのみ。びしや門は何をのまつしやる。」「おれは此のよろひかぶと小手脛當、軍のなりの様ぢやによつて、たてをのみます。」「イヤ是れは尤も、

辨天は何をのまれるぞ。」「アイわたくしは龍王。」「成程こいつもいいわ。」といふ所へ、稻荷が跡から来て、「福神たち爰にか、なんぞめづらしい事でもござるか。」「イヤたばこはなしさ、時に貴公は何をのまつしやる。」「おれはまづ五穀を守る役ぢやによつて、新田のみます。」「まことにそれくのおもひつき、どうもくへたものでない。」といふ内、となりの座敷をのぞけば、面體髪の手まで赤く、緋純子の羽織にひざやのうは著、下著はひぢりめんひぢゆすのおび、少ししつそを守るとみえてあかねのたびをはき、ひいろの大きせるに朱らうをすけ、がん首あがりにくわんくくとくゆらせてゐる者あり。「あれはだれだ、狸々とやらいふやつか。」「なにサはうさう神だ、こつちへよんだがいい、コレはうさう神。」「これはくどなたも、さつきからおものごしはうけたまはりましたが、ゑんりよいたしてをりました。」「イヤゑんりよにはおよばぬ、おてまへもきんねんは流行して、だいぶくめんがよいけな、いふくといいきせるまで、ちとお煙草入をはいけん。」「ム、是れは紅皮縮縮はさんごじゆ。ねつけはだるま、さだめてよいたばこであらう、一ツぶくおもらひ申さう。」「イヤそはでござります。」「何さ此の煙草入では。」と、一ツぶくのめば殊のほかわるいゆゑ、「これはどうしたものだ、はうさう神、あんまりわるいの。」「アイわるうござります。」「これはなんだ。」「ハイまつかはでござります。」

59

○歳暮年の市

談洲樓作

あるおやしきにて、浅草の市のみやけに、はりこの松だけを、奥女中へ小買物方より進上す。「オヤオヤいつも大黒様が、大ばんをかつて来てくれながら、此のやうな物を銘々にくれたは、いかな事でもあんまりな。」といへば、「ハテおまへ様方には、するぶんおよろこびの土産、ことしはしだしの松だけ、役者の彼の物をしやう寫しにいたしたの故、このうちに女がたでも立役でも、敵役の御ひいきのお方のまで色々の形、違ひはござりませぬ。」といふ咄が殿様へしれ、「いか様めづらしい事、併し四十七本もあるを、どれがたれのぢやといふしようこはあるか。」御意でござります。其の證據は仲間どもへ竹の皮を賣ります與兵衛と申す者、彼は彼の者の一物をことごとく存じてをる故、是れを御召し御聞き被遊ませ。「然らば皮與をよべ。」とて御前へ召され、「此の四十七本のはりこの松だけ、其方目利きを以て、是れほどの役者といふ事を屹と申すべし。」との仰せ。「かしこまりました。」とおめる色なく立ちよつて見れば、所も名にしおふ浅草市のみ合ひに、馬ぢや〜といふ程の紫色、鷹高、し頭、扱白黒は其の人のうまれ立ちにもよるぞかし。あるひはちよつぺい筋太く、しころのなきはずほけ物。皆それ〜に名を印し、一つも違ひはさふらはすと指し出せば、ありあふ人々殿にも感心あそばして、「ハテ扱能くも覚えし物かな。かくしようせきを申す仔細は。」「ハイわたくしはもと堺町の

芝居に二十年程をりました。「ム、役者といふ面でもなし、木戸番でもいたしてをつたか。」「イ、エそんなら幕引か。」「イ、エ。」「髪ひか。」「イ、エ。」「そして何をしてをつた。」「がくやにをりました。」「ム、がくやにては何の役を勤めた。」「ハイ居風呂を焚いてをりました。」

○蓮 牡丹

綠青人作

今は昔、本所猿江の寺にめづらしき蓮の花が咲き、形ほたんの様なるとて、貴賤羣集して是れを見る。かほどの賑ひでも、錢を儲ける心なきは出家かたぎ、とかくめんだうだから、花はもうちつてしまつたというて歸したがよいと、切戸口をいれて人を入れず、檀方から來てもことわりをいふ。折から門番にかご立てさせ、供の女中二人が、下男に何かさ、やくと、うなづき臺所へ行き、「ちとおたのみ申しませう、遠方から参りましたものでござりますが、此のお寺様にめづらしいはすがござりますと承りました。どうぞはいけん致したうござります。」といへば、寺の男、「イヤもうちつてしまひました。」「それはこまつた物ぢや。」と、かごのそばへ來て、右の次第をいへば、こんどは女中が來て、「只今承れば花はもうちりましたやうにござります、せめて其の跡なりとはいけんを願ひますと主人も申します、何とぞ御取次被成て下りませ。」「ハテおまへがたは遠方々々といひなさるが、どこだえ。」「ハイ品川邊でござります。」「ム、遠い所からだの。したが花はまだ咲いてるれど、見物があつ

59

て面倒だから、見せるなをしやう様の言付でござる。「モシ御納所様、今お聞きなされる通りだ、見せておやり被成ませ。」そんなら外はならぬ、其の人許り。」と見せて歸す。そのあくる日又来て、「昨日は有りがたうござります、今日も又参りました。」「ハア羅漢へかえ。」「イエ、あなた様へ蓮を見物に。昨夕主人も歸りますと、あのやうなめづらしい蓮がある物かと、きついほめてでござりましたが、今日は朝よりしたく致して参りました。」とはうもない一度見たらよからうに、早く見て歸りなさい。」といへば、悦び主従見てかへる。又そのあくる日もきて見物を願ふ。「とんだするきやうな、お前の檀那はなんだ。」「ハイ芝口の町人の後家でござりますが、むすこにやしきの十ヶ所もゆづつて、今は高輪の石橋萬やのとなりへ隠居してをります。」「ハテナ風雅人だな、そんならをしやう様にさう申して見ませう。」と、右の次第をはなせば、和尚きいて、「ハテかはつた物好き、けふで三日来るか。」「左様でござります。」「其の上の後家か。」「左様でござります。」そんなら見せるさ。」といへば、女中は庭の内へ皆々はひる。和尚も衣をひつけて、あいさつに出ようと、座敷の障子の内たばこほんなど出させてゐる。庭の方に女の聲として、「誠に蓮は花の君子、ほたんは花の富貴なる物といふが、いくど見てもあかぬ詠めぢやなう。」といふ物ごし奥ゆかしく、障子からのぞいて見ると、後家の貌が獅子鼻。

○直 段

金銀舎作米作

五六人連にて、深川へ遊びに来て、硯蓋が出ると、「コレ見やれ、くわるにふきのたう、九年ほ、蒲鉾、黒い物はよく跡に残るやつだから、直ぶみなしにくら物が有る。」「ドレ、八分々々。」「もちつとかつたり。」「九分々々。」「一寸々々。」「まける、ヨイ、ヨイ。」と手拍子を打ち、「サア此のてうしと杯、こいつは飛鳥山でかりるやうな銚子だ、幾ら物が有る。」「一寸々々。」「一寸二分。」「一寸五分一寸五分。」「エ、まける、ヨイ、ヨイ。」と手をうつ所へ、女郎が竝ぶと小聲になつて、「アノ上座に居る中どしまは幾らだ。」「あれは七寸五分が物はある。」「五分つけよう俺にくりやれ。」「どうしてどうして。」「そんなら八寸五分。」「エ、賣つてやれ、ヨイ、ヨイ。」「その次はやつと七寸五分よ。」「三番めは新造だ、きれいな物だが、骨ぶとで首がみじかい、六寸五分。」「七寸々々。」「ヨイ、ヨイ。」サアあのとしまは引きまみえへ、其の次は耳の脇にうが有る。いつちあとののはひたひがやくわんできはすみで隠してある、よく見やれへこがあるさうな、三人一所にいくら。」「文で壹分よ。」「あんまりだ。」「拾六寸々々々々。」「拾八寸々々々々。」「エ、まける。」と手をうつ故、女郎もずつと立ち、廻しの女が、「モシお前方は何の事でござりやす。つひぞねえ。」といへば、「コレ此のつひぞねえが尻はいくら物が有る。」「三寸。」「三寸でも氣がねえ、サアちつとねよう、皆どこへ行くのだ。」といへば、

59

廻しの女が廊下へでて、「コレおよしどん、此のお客を見たふしへとほさつせえ。」

○以 上

伊豆千別作

「コレお前は物しりだが、アノ手紙に以上と書くが、なんのいはれでござります。」「ハテ以上とは上を以てするといふ事よ、人の位にも上の人を以上といふわサ。」「ム、かみをもつてするといふ事か、ハ、アそれで穴賢がわかつた。」

○竹 光

砂邑亭文好作

今はむかし、神田邊を折助が酒によつて千鳥足を、子供がはやして、「エ、なまゑひやい、べらほうめ。」と笑ふを聞いて、「なんだなまゑひだ、うぬいつ酒をのませた、おれがすきでおれがのむに、するさんなやつだ。」といふ。「するさんもすさまじい、折助やいのろまやい。」とはやす。「何ぬかす、真二つにするぞ。」と脇差にそりをうつと、「ハアイうぬがどう切る事がなるものだ、抜いて見ろく。」といふ故、こたへ兼ねてひらりとぬけば竹光、「それみやあがれ。それで切れるものか、ハアイく。」と笑へば、「何うぬらとけを立ててやるぞ。」

○き ん 酒

月盛樓紫園作

兩國の駒止橋のあたりへ非人があつまり、けふは三河屋に大寄合があつて、おあまりのむまいものを大ぶん貰つて来た、おのしはどうした。「おれはコレ見やれ、めしと鯛のあら。」「六はどのやうな物に有りついた。」「オ、サ、京屋で太々講があつて、一ばんすきなしたみ酒、梅干をけに一つばいある。」「こいつはありがたいまんぶく長者、三人づれで外の宿なしどものこぬ内、お屋敷の塀のかけでたのしまう。」と打ちつれ、時に酒は一口づ、茶の湯にまはして、肴はぶれいかう手をつゝこみ、「ア、手前ばかりのむ。」「イヤかうせう、けんをせう、手前しつてゐるか。」「こいつを食をばかにした、けんをしらぬ事がある物か、いせんは三つぶとんにも坐した男だ。」「オ、そんなら檀那衆の時とはちがふ。拳にかつた者が呑みつこ。」「がつてんだ三けん折りづめだ、ムメヤリやん、さんな、むつつ、はまだ九。」といふと、辻番から、「通れ。」

○大 鼓

紅楓亭丹盛作

ある地主のむすこ、大つゞみを毎晩けいこせしを、長屋の者共家主へ言ふやう、「まいばんの大つゞみの音で、盤木かとぞんじて夜がねられませぬ、大風の吹く時などは、御無用になされて下され。」と願ふゆる、此の旨を親ちへいへば、もつともな事とて止めさせける。出入の仕事衆が来て、「若檀那此の頃はなせつゞみをお打ちなされませぬ。」「イヤそれはつゞみの音が、火の見のはん木の音にまちがふから、止めてくれろと大屋のたのみ、夫れで何のなぐさみもない。」といへば、「それはわたしが仕様

59

がござりやす。」と、小さな板へつゝみを繪に書いて、小刀をもつてほりぬくから、「夫れは何にする。」ととへば、「是れは屋根の火の見へ、つゝみのけいこのけむじるしさ。」

○けいこ所

千林亭萬善作

今はむかし娘の稽古所へ、年頃四五六の米やの手代、何かの世話をやいて、或時、「けふは雪もふれば誰もけいこにこず、お前もこたつにあたりなさい。」と、母おや娘のあたつてゐる中へ足をふみ込みついであぢな心になつて、娘の手だと思ひ母の手をにぎりければ、母も大ききもをつぶし、「此の里風さんは惘れもしない事をしなさる。」といふ聲に、娘も氣の毒がりて立つてゆく。母親の云ふ様、「是れ里風さん、おまへにかぎつてかういふ事は有りさうもない物、あの子の親ぢともお心やすいゆゑ、何もかも御ぞんじの上の事、後家を立てて居るのも、あの子を相應な所へ遣りたいばかり、夫れに娘の手と取り違へてわたしが手をにぎるといふは、おねえおまへもしつづかな人だ。」「コレおふくろまつたくさういふわけではない、おまへの手と知つてにぎつたのだ。」「そんならわたしをなぶるのか。」「なぶるのでもない、相應な所が有るから縁付きなさるかといふ相談さ。」「ばからしい手を握らずと口で云うたがよい。」「イヤサ手をにぎつたは、五十兩の支度金と云ふ事よ。」

○蛇

美知丸作

是れも今はむかし、隅田川邊へ摘草に行きしに、下女のまたぐらへ蛇が這ひ込み、大らんを入れる。江戸へ醫者を呼びにやらうと云ふ所へ、武藏やの若い者來かゝる、「氣遣ひなされますな、蛇は今出て行きます。」と云ふうち、へびはよわつたかたちでぬけて出る。人々、「こいつはきめう、どうして今出るといふ事をしつて居る。」といへば、若者、「そこにはちつと見どころがござります。」と云ふ。「なんなら夫れを傳授してくれろ。」と、檀那が金貳分出して頼めば、「大事のことだがをしへて上げませう、女中のまへへはひつた蛇の直に出ると申したは、あの女中の顔をこらうじろ。」「顔がどうした。」「ほ、が赤い。」

○りちぎ者

黒羽二亭金埒作

今はむかし、稼ぎにせいをだして、芝居を一度見た事もなく、女郎かひはなほの事、錢の出る事はつき合ひもせず、夜から夜まで遊ぶ事きらひなもの有り、長やのうちにさうれいがありて行かねばならぬゆゑ、浅草邊の寺まで行き、かへりに友だちが「あんまり客いやつぢやによつて、あいつを吉原へつれていて、やみつかせてやらう。」「こいつはよからう。」と相談して、「コレ徳兵衛、おのしは三十になるまで吉原を見た事はあるまい、せめてけん物にでもあゆみやれ。」「錢さへ出ぬ事ならゆかう。」と連れだち、大門をはひると女郎の道中、「コレあれが女郎か。」「オ、サモウ見世が出た。」と、格子先

59

へつれて行き見せれば、「うつくしい事だ、一とばん一兩もでるか。」何サあれが二朱だ。「うそをいふぜえ。」「うそぢやあねえ、酒肴に本膳めしをはら一つばいくつて、ねだうぐがにしきひぢりめん、アノ女郎を抱いて寝て二朱よ。」「ハテナそれで二朱とは二朱銀はありがたい、内へかへつてだいて寝よう。」

○大屋

裏住翁作

「お前の御子息様は、さてく御はつめいでござります、まことに末たのもしい。」とほめければ、「イヤ左様おつしやつても、倅めもはつさいで口がすぎます。」といふ。扱は思ひつきのしやれをいふところへ、「なる程人には色々がござる、此の閑大の男が、こしに萌葱のふといひもで、文箱とござんかごを荷つて行くを、何だと云うたら、五歳ぢやと云ひました。」といへば、「一人の男がいふには、「夫れはめづらしくない、むかし利休時分には、茶の湯をした人に三歳さへある。」と云ふ。こちらに居た男がまじめな顔で、「何さ夫れより私共の大屋さんのむすめこは、二歳でまいばん五人組を頼みます。」

○湯どうふ

奥久作

ある所へ夜啼に行きける折から、子僧出で、「檀那さまお夜食をおあがりなされませ。」といふ。「あなたにもあける何ぞ出来たか。」「ハイとうふでござります。」「ム、八はいどうふか。」「イ、エ。」「いいし

やきか。」「イ、エ。」「くすかけか。」「イ、エ。」「そして何だ。」「ハイゆでたの。」

○名酒屋

橘作

いまは昔、深川へ名酒やといふ茶屋ができた、まづいい女郎は紙やお菊、もめんやの梅といふから、呼びにやつた所が、今汐留まで二だん送りにいつたといふ。隅田川のお汲は寒の見舞にいつたといふ。「どうで此の一座ですつとは歸られぬ、ちつと悪いのでもいい。」といつたら、「アイサちつとわるいのも、新川の出ばんで直しになりやした。」

○祭り

反哺齋作

「今年のまつりには何がよからう。」「ばか太鼓や唐人でもねえから、をどりを町内の子供にをしへ、二十人ばかり揃へたら、りつばでよからう。」といへば、「また雀をどりか、こいつも久しい物だ。」「ハテ雀をどりではない、鶯踊といふ思ひ付き、まづいしやうを鶯茶縹子の半襟に、ひぢりめん梅を縫つた下帯の揃ひで、二十人どうだらう。」「こいつはよからう。」と、やたいを梅の大木にして、囃子方梅の花笠、その日にもなつておし出した所が、花やが所望の拍子木を打てば、うぐひす踊が所望ぢやがつてんか、オ、サテがつてんぢやとをどりを見て、皆々がこいつはいい、あれは何所のまつりだ、おう桶町。」

59

○女郎の十

千露作

今は昔、吉原へ通ふ道に、女郎の鬻駕昇があるといふ噂にちがはず、雪のちらくふるに、こま下駄で裾を引きずりながら、「かごをやりんせうく。」といふ。「大門までいくらでやる。」「今宵は雪がふりんすから二朱でおさんす。」「三百にまけねえ。」「ばからしうおす。」「なんなら四百よ。」「マアおのりなんし。」とのせて、「棒組さんようおすか。」「アイお出でなんし。」「ヨウスオウスくといつてそりりとやる。」「コレこゝはどこだ。」「アイ駒形でおす、どうも雪でなりんせん、酒手をおくんなんし。」「どうでもせう、早くやつてくんない。」「アイ檀那もやほではありません、ヨウスオウスく。」「いつてもねつからやらず。客も氣をもんで、「エ、じれつてえ、はやくやらねえか。」といへば、「ばからしい、おめへさんばかりおやりなんし。」

○米

始亭作

是れも今はむかし、つき米やの莊治が藏にて、仙臺米の仲人にて、播州米の方へ美濃米が娘お米を嫁にやりし所、ほどなく懐胎して、當る十月に蟲氣つき、やれ米あけざるよさん俵とさわざたち、升とりば、が来て、「コレハちとむづかしい。」大門通の萬石どほしを呼び、俵をもみながら通しにかけても出かねるゆゑ、腰のあたりを二つ三つた、けば、とたんの拍子に子米が出る。みなくいい子米だと見れば、糠ア〜。

○白眼競

三毛作

今は昔、にらめくらの會を催し、角力のごとく東西に立ち分れ、土俵へあがりならみあひ、笑ひたる者は負けと行事はれを定める。扱だん〜に取りあがり、大關になり、東大目玉々々々、西はまじめ顔まじめ顔と雙方立ち向ひにらめる、暫く勝負つかねば水をませ、それより秘術を盡してにらめて居ると、だん〜目玉がいたくなるゆゑ、兩方の關取も手を出して目をいぢらうとすれば、見物から、「こすりはならねえぞ〜。」

○柔術

青奴作

「コレ八や、此のごろおらが長やへやはらの師匠がこして来た、おのしやおいらも、どんな事があるめえ物でもねえ、習ひにゆかう。」と、「アイお頼ん申しやす。」といへば、先生立ち出で、「どつちからござつた。」「ハイ長やの者でござりやす、どうぞをしへて下さりやせ。」「ム、下地でも貴様たちはあるか。」「したちと申してけんくわといふと、そつほうをなぐるより外はぞんじませぬ。」「ハ、それは何の役にたたぬ。まづぶつて蒐つて見さつしやい、それどうだ。」「アイタ〜、此奴はいたい。」「時に是れが露のあたりむさうがへし。」「ア、先生様あやました。」「サ是れが表、又裏をとればすぐにかう

59



致す。「吉やとんだこつたなあ。モシ先生様、やはらに裏表がござりやすか、私はおもてよりうらにいたしやせう、おもてはわるうござりやす。」「なぜおもてはわるい。」「ハテおもては知つた人にあつた時めんだうだ。」

○玉手筥

玄武亭龜樂作

今はむかし、掘貫の井戸ことの外はやり、ある所のむすこ井戸をのぞき、つい中へ落ちたる所、そのこともしらぬ大海にまんくとわけ行けば、金銀珠玉を盡したる樓門に、海月の門番出で、「何者ぞ。」と云ふ。「我は日本の者なり。こゝはいづくぞ。」ととへば、「龍宮城なり。あやしきやつ。」と龍王の御前へ引きする、大魚あつまりせんぎの所、乙姫ちらと見給ひ、鯨の局をめされ、「どうぞあのものをみづからが殿御にしたい。」との願ひ、龍王にもいにしへ浦島の例もあれば、早速増になされける。扱かのむすこ、龍宮は日本ほど面白くなければ歸りたく思ひ、乙姫をそゝなかし脱落の相談をすれば、「そんならわたしは跡から、おまへは先へ此の玉手筥をもつて。」と、或夜ひとりしのび出で、むしやうにおよぎて海邊につきしが、くらははくらしいづくともしらず、けつまづきて玉手筥をはふり出し、蓋のあいた儘とり集めてゐる所へ、鯨を始め鰐鮫其の外追ひかけ來り、「こゝに居る。」と、えりつかんで引き立て、「こいつではない。コレ今こゝへ若い男は來なんだか。」

○十軒店

明石月影作

頃は二月の末、ある小道具やにて、去年の賣り残りの雛を出し、今年は早く賣れる様に、御酒を上けて祝ふ。かの雛大きに酔うて、「なんと次郎左衛門、おのしなどは昔での安くない男だが、近年の出來星めらにおし付けられて、賣れないとは業腹なことだ。」「なるほど善次が云ふ通りだ、もう十軒店に下りめらが出てゐるだらう、たゞきこはしてやらう。」と、大勢づれで雛店へ行き、「こいつらはなんだ、しやきばつて居るが、まだ江戸の料理はくつた事はあるまい、どけへぞうせろ、つがもない。」といへば、京人形ども、「こなはんどこからござんした、めつさうな、きよとい事ははんす。」「何おきやあがれ。」と騒ぐゆゑ、近所から杯臺小重宮が來てのぞいて見て、「わかるいやつらが來た、二三年あともへ店にゐる次郎左衛門と善次だ。どうぞしやうがあらう。」と出て、「コレおのしたちがいふも無理ではない、マアこつちへ來やれ。」とつれて行く。しばらくあつて、「モウすんだ。」といへば、京人形共、「どういふ事でいんだぞい、酒でもかうたか。」「インニヤあの上に酒ではやかましいから、大孫で樟腦を買つて出したら、コリヤたまらぬ、首をひつこぬいてしまはれるというて逃けた。」

○釣り好き

世事廣丸作

深川の木場の邊で、一心ふらん岡釣をしてゐる所へ、「もしこゝへ二十四五な男は參りませぬか。」と

いへば、「アイ来ましたか。」「縞の羽織を着てをりましたか。」「アイ羽織を着て来ましたか。」「なんぞ喰ひながらきましたか。」「アイくひますく。」「アノ女のつれがありましたか。」「アイ有りました。」「女も若い娘でござります。」「アイ左様々々、ホイ逃けたわい。」「どつちへ逃げました。」「イエ大きな鮎を。」「イヤサ其の人はどこへ参りました。」といへば、「エ何をいひなさる。」

○虎

鳥亭百馬作

和藤内異國をしたがへ日本へ歸り、「かうしてゐるもむだなれば、なんぞあきなひをしよう、まづ國姓爺藤内といふ町人になり、料理見世も松東庵とまちがへば、呉服やがよからう。」と、幸ひ唐より持ち來りし織物を賣り、正札つきの大見世、唐人を野郎にして、手代とんきんびやうゑ、じやが太郎兵ゑ、かほちや右衛門そろばんをひかへて、はんとりハア、ちやばんよハアといへば、とらは大伴頭、ことの外商ひがあれば、虎も半分いろ男になつて女郎買ひ、地獄になじみが出来て、著た物をぬいでふんどしの敷きぞめをしてやるとの沙汰、和藤内是れを聞き、「につくいやつ生膽を取つて、木薬やへ賣つてやらう。」といふを、母が止め、虎を呼び付け、「コレこなたは女郎になじんで虎をうつけな、此の後やめにしや、たび重なるとまた御祓筈だよ。」

○疊 ざん ん

前 庄 作

吉原の安見世の女郎、馴染の客が外へ行くをつけ、ことわりの文をやつても、やつぱり呼ぶゆゑ、とらまへてやらうと、新造を大門へつけて置く。新ざうも寒いゆゑ、「どうもしれんせん。」といふ。又あすの夜おいらんいふやう、「あしたは早く七つから大門へつけてるなんし。」といへば、新造アイと言ひながら、かんざしを疊へ打ち付けかぞへて見て、「モシおいらんえ、あすきつと居續けでありんす、行くはむだでおさんす。」「オヤけしからねえ、おめへの疊さんできつとした事がしれるものか。」「イエイエ主居續けは違ひはおつせん。」「それがどうして知れるえ。」「此のかんざしは流しでおつす。」

○ひ ろ ひ 物

鶴 步 作

今は昔、せつた直し貳朱銀一枚ひろひ、女郎を買ひに行き二階へあがると、廻しの女が、「モシおなじみがござりますか。」「インニヤふりだ。」「そんなら申どしま衆がよからう。」と、杯もすみ酒もした、かのんで牀へいれば、女郎も手あるやつで、「こんやおめへのなじみがなくてわるいねえ、わつちも名代のこゝろさ。」といへば、「何さこゝへはじめてよ。」「そんなら是れから来てくんない、一度ばかりでこれないでは、新造衆とちがつてわつちも茶やの手めへがわるい、うらはつけてくんない、それからは又はなしあひもある物だ。」「オ、サ裏はイイ皮があつた。」「ばからしい人をてうす事ばかり。」といふ所へ、「モシおむかへでござりやす。」といふ。「オ、もう歸らう。」といへば、「コレサ裏に

59

くる氣なら直していな。」と引き止むれば、眼の下へ指をおつ付けてべエイく。

○勘 畧 の 卷

曳尾亭素的作

殊の外しいやつ夜咄に来て、とかく勘畧が第一でござる。鬢もあついと油がいらいます、絲びんにすりこかして、夏のうちはばうずでもすみます。また飯のさいには干物、これも朝は頭をとつて、よくやいてもんできらすの汁の中へ入れて喰ふ、其の跡を片身づ、一日にくへばよい、此の外だんく御指なん申さう、イヤおいとま申しませう。「おかへり成されますか、らふそくを黠せ、おさうりが見えまい。」それがもうつひでござる。是れごらうじろ、くら闇でもおきにしれます。「ハテ扱奇妙さぐりでしれますかな。」イヤサ爪のさきのあかりで。

○十 露 盤

本肆樓要賀作

「コレサおのれも十五になるが、行燈を見ると眠る丁稚だ、手習をしをれ、そろばんは三年掛つて、八算をまだおほえぬ、たはげづら、サアこ、へ来ておいて見ろ。夫れ十二萬三千四百五十六石七斗八升九合。それからおいて見ろ。なんと申したべらほうめ、二一天作の五、ア、又忘れたか、是れよく譯をききをれ、二一天作の五とは上の玉を下して、それ此の十といふ玉を、上の玉を五玉といふわ、十を二つにわると五つになるわ、これわけがしたか、玉をみるやい。アイく、ではすまぬ、エ、

玉をみやあがれ、なんとしれた。」「アイしれました。」「なんとしれた。」「ハイ洲走りの臍と。」

○脇 差

古今亭獨歩作

今はむかし、有徳な町人有り、出入の道具や來りて、「檀那よい脇差のさしぬきができました、おかひ成されませぬか。」「どれ見せさつせえ。」と目鏡をかけて、「ム、なんだ目貫は稻穂、縁は麥藁、すぢに稗時、頭は芥子な、こ、鐔は阿波の鳴戸形、鞘は豆かいらぎ、こいつはよいおもひつきだ、身はなんだ。」「ハイ小豆長光でござります。」「テモ好みがおもしろい、直段はいかほど。」「アイ此の間の相場では五十兩程、天氣次第で相場が狂ひます。」「今一腰の脇差は、ム、目貫が狼に衣、頭は鳶に鷹、縁は狐を馬にのせた所、鐔は鯨にへうたん、小柄は猫に小判、鞘に月があるから、兔がさぐりに有りさうなものぢやが、身はなんぢや。」「アイ身はおまへ様のおすきな物。」「ム、亭主の好きな赤鯨か。」「イ、エ鞘の銀の月を用るてきせるいれに。」「なに月をもちるとは。」と引つこぬけば、すつほん。

○み え 坊

仙臺 文珍尾守作

女郎かひの居つゞけに、新造が鼠を飼つてゐるを、「ドレちつとかしな白鼠だの、近年は大分ある。」「アイわつちがのは唯の鼠でありんす。」「ム、こいつはいたづらをするやつよ、國に賊人家に鼠とみんなわき物だ。それだからむさくろしい人には蝨かわく、身だしなみが第一だ、おいらは薬にせうと

59

いつてもねえ。しらみたかりには、おめへがたまあやまるだらう。」といふ内、「モシエぬしの衿を見なんし、それうはばひをしんすにえ。」といへば、どれと見て、「ハ、ア噂をいへば影がさす。」

○富士講

芝樂亭慈悲成作

「どうだ權八、替る事もねえか。」「オ、能くきたな、サアあがりやれ。」「ム、あがる、一ツぱい香ませるか。」「酒を買はうにも錢が一文ねえが質くさもなし、ホンニおつりきな物が有る。富士講の行衣が有る。今は止めになつてこいつもいらねえ、二三百はかすだらう、待つて居や今かりてくる。」と質やへ行き、「コレ伴頭是れで三百かしてくだせい。」「何こんな背中に佛様とふじ山に猿がおして有る。どう貸される物か。」「ハテ扱是れにはかまはずと、おれが貌で二百でもかさつせえ。」「おめへの顔づくも久しい顔だ。」といひながら、錢五十だして、「サア是れでよくば持つてゆかつせえ。」といへば、手を合はせ、「コレ富士せんけん様のだ。何とぞ一筋にたのみたてまつる。」

○はやり諷

四角堂治呂康作

いまは昔、妓女二人ありけり。姉は實子にて妹はかゝへの娘なれど、あね様くといひけり。そのいと外にて潮來節の新文句の唄を書いて貰ひ、内へかへり取り落してありけるを、母ひろひけれども無筆ゆゑわからず、此の程座敷に出て、夜更けて歸る事度々なれば、色事の文とこゝろえ、實の娘を呼んでいふやう、「何でもあいつは蟲がついたと見える、油断しやるなよ。」「コレかゝさん、かはいさうにおとなしくしてゐる物を。」「インニヤおれが證據を持つてゐる。是れを讀んでみや。」とさし出す。娘おしひらいてよむ、「ま、よ田舎もまた住みよかる。」母おや、「ふといあまめだ、缺陷をする氣だ。」

○星

烏亭龍馬作

是れも今はむかし、むしやうに虚言をつくる者有り。「どうだうそつばち、久しく逢はぬがどこへいつた。」「オ、とんだところへ、去年雷にさらはれて天竺へよ。」「ナニてんぢくへ、こいつは面白かつたらう、てんぢくはどこに居た。」「四日市に。」「ハテナあつちもさむいか。」「寒いだんか、雨がみな氷つてふらせる事がならねえ、ひねの雨をあられにして漸くふらせるくらだ。」「天の川を見たか。」「オ、サ見た。」「星は大ぶんあらうな。」「ぬかほしは皆踏んで通るわ、まづ牽牛織女といふは七夕様よ、夫れから七曜九えう夜ばひ星ははだかである、澀柿のやうな面の何だと聞いたら甘干、顔のしわのよつたは梅ほし、二つ巴の侍は大星、又やせこけてあごで蠅を追つてゐる、あの星は何といふと聞いたら、あれはとほし過ぎたの。」

○化物

琴多樓鹿兒善作

59

百語物のひまにや有りけん、化物大勢あつまり、中にも見こし入道、「ナントいづれもじよさいなく、秘術を盡してばけるといへども、當時の歌舞妓役者ほどばける事はなるまじ、岩井半四郎などは一人して七化をするよし、是れは見ておかしやれ。」といはれて、一つ眼と河童が其の芝居はどこと猫またにきく。「まづ富澤町から長谷川町横へ、人形町といふを行くと、虎やといふ菓子やの蒸籠がつんで有る、角から右を見ると、芝居の看板あつてにぎやかな。」と、さすが飼猫のあがりほどあつて、くはしくをしへる。「そんなら化物とみえぬやうにしてゆかう。」と、かつばは手拭を米やかぶりにすれば、一つまなこはほ、かぶりを鼻の下でむすび、をしへられた通り行く。中村やの前の木戸をはひると、向うより芝居者が、「ほ、かぶりかつば。」といへば、化物、「おきやあがれ、づわうへいな。」

○に は か

五 明 作

年忘れに思ひつきの俄狂言、忠臣蔵がよからうと、てんぐにこんたんをする中に、あんなの櫛伯老は撫付ゆる本藏の役、せりふのしれぬ所は淨るりとつて間に合はせ、もう槍をつゝこまれ、手おひながらぬからぬ本藏、「イヤ、それはひが事ならん、用心きびしき高師直、障子ふすまはみなしりざし。」と淨るりをかたる内、どうも身ができぬゆる、思ひついてたばこ入れよりたばこを出し、槍の疵口へおしこむ。見物が、「イヨこまか。」と譽めると、「インニヤこまかではない五分切だ。」

○ほ しい も の 帳

富 存 作

今はむかし、ほしい物帳といふ帳をこしらへ、持つてゐる男あり。中にはたばこ入れさせるは銀と書き付け、あるひは八丈羽織、上著は黒ちりめん五所紋、下著は八丈縮唐さらさ、帯ははかた織、みな繪にかき、其の外たんす長持手道具までことごとく記し、女房は近所の器量よしのおひな、めかけおさく、なじみの女郎は扇やの瀧川、是れはにしきゑをはりつけ、ふだんながめてたのしみる。又其のあたりに、此のとほりこしらへ持つてゐる者とよりあひ、たがひに帳をひろけ、おれがたばこ入れは越川、てめへのは丸角でかつたと書いてある。あれこれを見る内、「女房おひなは手前の帳にも有る、コレおのしは間男だ。」「インニヤこなたが間男だ。」といひつものりけんくわになる。大屋来て、「貴様たちはなんのけんくわをする。」「モシ御聞きなさい、わたしがほしい物帳にある女房を、あいつが間男をして、帳にかいてあります故の事でござる。」「どれ二人の帳を見せさせえ、ム、なる程貴様の帳はおと、しの年號、こなたのは去年の書付だ、ま男にちがひはない、七兩二分出させえ。」「大やさんとんだことをおつしやる。」「ハテ此の大やがかしてやる。イヤ金ではない、ちゑを。」といひながら、二つ帳へ書いて出したを見れば、あちらの帳へ金二兩二分出し、こちらの帳へは七兩二分入り。

59

○松魚

東西南北平作

儒者めきたる浪人の門口を「鯉々」と賣るこゑ、あるじ立ち出で、「コリヤ魚賣人々々々」と呼ぶ。「エ、わしが事かえ。」「オ、サその松魚は價いか程ぢや。」「なんの事だ、あきんどにあだ名を付けてなぐさむのか。」「イヤ左様ではない、魚賣人とは肴うりの事、松魚とはかつをの事ぢや。」「小むづかしい言ひやうだな。鯉はそくろんじさ。」「ム、そくろんじとはいか程の事ぢや。」「アイそくは一貫の事、ろんじはしれやせう。」「イ、ヤ知れぬ。」「ハテろんじは六百の事さ。」「不佞はじめてゑとく致した。」といへば、肴うり、「エ、おめへも論語よみのろんじしらすだ。」

○唐女

山徳作

今は昔、筑紫松浦瀨へ唐船一艘吹き寄せたり。浦人たちよりは是れを見るに、宮女と見えて羅綾のたもと錦の袖、花のかほばせ雪のはだへ、「オヤてんこちもねえ、唐の女だ。」といへば、日本人々々なむからたんのうとらやあくといへども、ひとつもわからねば、「コレ女中、遠い所をたつた一人か、おやちどのかおふくろでもついて來たのか。」といへば、唐女バア〜といふ。「ム、ばあ様とか。」

○玉

桃多樓語昔作

やしき出入の道具や、劍持力右衛門様に毛巾著をたのまれ、王子の稻荷參りの歸りに、本郷のほし見世にて、狐の皮のたばこ入れに、尻尾をきせる筒にしたのを買ひ、是れでけふの小遣ひは有ると酒をのみ、唐の芋を二つ小僧がみやけにせうと、兩方の袂へ紙に包みて入れ、日も暮方にのろ〜行けば、「駕籠をやりませう安〜。」といふ。「市谷まで幾らだ。」「二百下さりませ。」「とんだ事を、百なら乗るべい。」「エ、戻りかごでもあんまり安いが、檀那もじよさいはあるまい、サアおのり。」とのせてだん〜お茶の水のはうをいそいでゆく。駕籠がゆれるひやうしに、かの尻尾の煙管筒が、羽織合から出ると、跡棒が見付けてたてる時、「棒組ちよつと見や。」とめくばせして、うさんなかほで、「モシおめへさんは王子へお出で成されましたと仰しやつたが、市谷はどこまで参ります。」「茶の木の稻荷の近所まで。」「エ叔こそ棒組ことは仕合がいいぞ、モシ檀那お願ひがござります。」「ム、願ひとは酒手か。」「イ、エもつたいねえ事、おまへ様の物をどうして、何ぞ福を御授け下されませ。」といふから、道具やもさぐつて見れば、きせる筒がさがつてあるから、叔はとこ、ろえ、まじめになつて、「あすは又半田稻荷まで用事がある。」「へ御苦勞でござります。」といふ中、市谷へつけば、「大儀々々、其方たちへ是れをやる。」と、唐の芋を一つ宛やれば、「ハテ有りがたい。」と、跡ふしをがみ分れ行く、やうすを見て狐二疋立ち出で、「今のを見たか。」「サレバ今は素人にゆだんがならぬ。」

○三 人 男

橋々亭萬羅作

59

今は昔仇なる女、夫にかくして忍び男二人有りけり。ある時一人の閒男來りる折ふし、又一人の閒男來て、寢て居る所をおさへ、「此の野郎めはふといやつだ、おれが念ごろにしてる女を、よくしめやアがつた。」とどうしたと、コレエうぬが色をして居る事をたがしる物だ、うぬ惚れなやらうだ。」とつかみ合ひるる所へ亭主歸り、「是れはどうした事だ、人の内へ來て。」と、「オ、御亭主か、こな様がくればモウ百年めだ、つがもねえ事だが、あの女と三年色をして居る、それにあいつが太平をぬかすから、がつてんしねえ。」とコレエうぬが三年なればおらあ五年のなじみだ。サア閒男にちがひはない、これからは見事におれにくれろ。はなしのやうな何の事だ。」といへば、亭主、「こいつらは五年の三年のと、あかくなつた味噌をあけやアがるが、おれはあの女を女房に十年して居る。」

○俊 寛

白寶舎晉家作

今はむかし、中宮御産の御祈りによつて、非常の大赦行はる。鬼界が島の流人丹波少將成常、平判官康頼二人赦免にして、船にのせてこぎ出す。俊寛一人跡に残り、磯ばたに伏しまるる所へ、海人の千鳥かけ來り、「て、様よ、せなや兄丈はどこへいきめした。」ときけば、「ヤア千鳥か、二人はおゆるしあつて都へ歸る、早く呼びかへしや。」といへば、「アイ。」と千鳥が岩の上へかけ上りて、「コンナむかうのふね引。」

○伊 勢 參 り

紫 雄 作

丁稚子供より合ひ、「コレ竹松どん、おいせ様の太々をうつとうまい物をたんと喰ふとよ。」と「ほんにかそんなら龜吉どん、おいらもぬけ參りをして、だいくをうたう。」と、そこの心ざしある人をたのみ、ろぎん少々こしらへ、お師の名は聞きおよべば、なんなく山田のお師をたづねて、「お頼み申しませう。」御師の手代出で、「どこからござつた。」と「アイ江戸藏前の伊勢やから參りました、太々をうちたうござります。」と「これはよう御出で、舊冬參つた時おはなしもなかつたが、存じ寄らぬ事、跡から大ぜい御出でか。」と「イ、エ私共二人。」と「ハテな。」といふ中、錢百文づゝ紙に包み、「モシ是れで太々を打ちたうござります。」と「ナニ太々を、此の子は氣がちがつたか、コレそつちの檀那の太々は五十兩、ざつとして二十五兩だ、とんだ事をいふ。」といへば、「竹松どんどうせう、モシそんなら此の百で太々がならずば、きんかんでも。」

○百 夜 車

水魚亭魯石作

今は昔、小野小町は美人の名高く、歌は世にしれる所なり、されば戀ひ慕はざる者なし。深草の少將思ひのたけをしらせんと、雨のふる夜も雪の夜も通ひて、車の櫛に其の數を書いて、九十九夜通ひしかど、此の戀叶はずして思ひ死せられしと云ふ取沙汰。女中達これを聞き、小町のおそばへ參り、

589

「少將さまには終におはてなされました。」といへば、小町聞いて局を呼び給ひ、「コレ其の惚帳を出して、少將どのの所は消しておきや。」

○稚名

坂彦作

是れも今は昔ある人の出生の男子、をさな名を非人に付けてもらへば、息災延命なりと聞きて、早々非人をよび寄せる。「檀那樣なんの御用でござります。」外の用でもない、倅が名をつけてくりやれ。「ハイお生まれなされたのか。ようおふとりなされて、そして男の御子でござりますか。」「オ、サたつしやな名がよい。」「達者なお名なら虎松様か牛藏様か。」「アイヤするぶん丈夫な目出たい名がよい。」「左様なら石藏様。」「ム、せき藏とはなぜ。」「ハテ石藏毎年まいとし、ム、めでたい、はびろのおにはへんどんととびこむ、さうだわはねこむ、ごいはひ申せば目出たいさうだわ。」「ア、コレコレ昔からある名で、壽命の長い名がよい。」「左様ならアノ三浦大助様はどうでござります。」「三浦大助とは百六つさ、まつと長いはないか。」「浦島太郎は八千歳。」「まつと長いはないか。」「東方朔は九千歳。」「まつとながいは。」「西の海へさらり。」

○妙薬

鶴聲樓作

「コリヤア寸伯様よう御出でなされました、親父が氣色がわるいと申します、どうぞ御薬を。」「ドレドレ脈を見ませう。是れは痰ぢや、此の薬をのませて見させえ、あす參らう。」というて歸り、翌日來て、「どうだな。」「アイ同じ事でごさります。」「ドレ脈を見ませう、これはきのふよりもわるい、腫が見える。」といへば、「モシどこもさうは見えませぬが。」「ハテどうしてこなたしゆに知れよう、かほの内手足にむくみのあるのが、しゆのあるのだ、此の薬がよからう。」とおいて行く跡へ友達が來て、「どうだおやぢ。」「オ、徳右衛門聞いてくりやれ、アイ醫者どのがきのふは丹だといったが、けふは朱だといった。毎日赤くなる病ださうな。」「ハテナ夫れにはおれが妙薬をしつてゐる、おらが小僧が疱瘡の時、紅を顔へなすつた、おやぢも朱から紅にならねえ内、上からなするがいい。」と、病人の顔へ紅をなすと、おやぢが、「コレ徳右衛門どうする。」「ハテ黙つてゐさせえ、ねから直してやる、コレはながでるが風だらう、はなをかんでやらう、ふんといはつせえ、まつとく。」といふ内、のほせて鼻血が出ると、「おやぢどの病は直る、おれが請合だ。コレ丹から朱になつて、はな血が出た、赤い物は是れぎりだ。」

○野狐

一陽亭秀朔作

今はむかし、田舎にて狐出て人を化すといふこと、武邊自慢の侍、退治せんと彼の所へ行きてまぢるたる。十六七の器量のよき娘來り、「私は向うの村まで參る者でござります、どうぞおつれなされ

59



てくださりませ。」といふ。「ふといやつ、うぬは此のあたりに住んで、人をたぶらかす狐であらう、おれが女好きだといつて、さううまくばかされるものか、おきにしろ出なほせく。」と言へば、忽ち男に化け、「私は江戸の者、一人旅なれば、何とぞ御同道。」と言ふ。「うぬも今の狐だ、よしにしろ。」といへば、ぢいになり、「モシお侍様。」「ナンダ又祖父に化けたか古い。」といへば、今度は祖母になる。「ば、あでも狐だ。」といはれて、しやうがなさに狐になる。「それみる狐め、己生捕りにするぞ。」と追ひかくれば、狐は叶はじと逃ぐ。追ひ詰められて藪の中へ入る。尻尾をとらへひつばる拍子に、コン／＼クワイ／＼と、狐はなきながらしつほがぬける。「扱こそみせしめにはれをみやけにする。」といふうしろから、百姓が、「なぜ大根をぬいた。」

○雷の玉子

桑梯亭喜丸作

今は昔雷の玉子をもらひ、本の物か何卒かへしてもらひたいというてもしやうがない。「イヤ私が雷にかへして、お目にかけてませうが、是れには大ぶん物が入りますから、金子二十兩ばかりお出しなされませ。」「ム、するぶん物にさへならば。」と頼み、それより十日程過ぎて、「モシ檀那、玉子がわかれて中からちひさなかみなりが出ました、ゆうべもコヨ／＼と鳴きました。」「ハテナどれはやう見たい。」「ソレおめにかけてませう。」と袂をさがして、「コレ道で落ちたかとんだ事だ。」と大はだをぬいで、

「オ、有つたく、是れごらうじませ、あらそはれぬ物でござります。」「どうした。」「臍にひつついて。」

○文

うす姉敷婦作

吉原の女郎より毎日々々の文、こん夜もゆかねばならぬと、客もあつくなつて行く。友達がうそをいふやつといへば、「うそなら髪結牀の市五郎に聞いて見や。」といふから、牀の亭主に聞けば、「アイサ毎日此のやうに情のある女郎でござりやす。」と、文を一束出して見せる所へ、かの男来り、「なんと羨ましいか。」「ほんにおのしはあやかり物だ、定めて面白い事があらう。」とあけて見れば、漸くいろはを習うたやうなかな釘の折、「これはよめぬ、是れをおのしはわかるか、してまいばん行くな。」「ハテやほな事をいふ、わからぬから、まいばん聞きに行くワサ。」

○そ

三升鶴女作

殊の外そ、かはしき女房、堀の内へ参りてかへり、「モウ五つでもあらう、大きにくたびれた、湯へはひつてこよう。」と、下女をつれてゆけば、入口でひたひをくらはせ、「いたくはなかつたか。」といへば、下女も承知して居れば、「イ、エキずは付きませぬ。」といふ。湯の中にて近所の内儀に逢ひ、「おそう御出でなされたね。」といへば、「アイ今日は堀の内へ。」「それはおくれたびれ。」「イヤもう鳴子から先

59

が道が悪くて。」といひながら、その内儀の足を洗ふゆゑ、「おかみさん何をじやうだんしなさるか。」といへば、「コレハごめんなさい。わたしがおみあしかとぞんじて。」

○無 筆

萬葉の假名女作

一字不通の者、年玉の半切へ、近所の人を二人たのんで名を書いてもらふ。「扱々無筆といふ物はふじいかな物、お蔭ですはやく禮に出ます。」といへば、一人の男、「何さ字といふ物はよく拵へた物、氣をつければしれます、先づ口といふ字は口のなり、目といふ字はめのかたち、耳といふ字も同じこと、鼻ははな毛まであります、なう仁兵衛さん。」「左様々々時に夫れでわしも思ひ出した、いつぞや本店へいきやしたら、小僧が小づかひ帳をつけて居る、なか／＼あぢをやると帳を見たら、なが三文八文あぶらけ、四文字と書いてあるから、「是れはなんだ。」と聞いたたら、「酢でござりやす。」といふ、「酢に子の字を書く物か。」といつたら、それでも金子の子の字でござる。」といひやした。「ハ、と兩人笑へば、亭主、「仁兵衛さんおめへ子供にはぢしめられたの。」

○孝 行

千鳥連作

今はむかしまづしく暮せしもの、母親春の末に筍を望む。安き事なりとてはる雨ふりければ、みの笠を著て鋏をもち、竹の林をたづね掘りけれども、一本も得ざりければ、扱は我が孝心天へ通じざるか、又あすも来りて掘りて見んと歸る。其の夜竹の林の近所の櫻の木がいふやう、「なんと桃の木、竹といふやつは物をしらぬやつだ、親孝行な者がたけの子をほりに来たのに面も出さねえ、唐では二十四孝の孟宗が、雪の中でさへ掘り出したけな、心ないやつらだ、日本の面よごした、おいらが先祖は、正直爺が枯木に花を咲かせうといつて、灰をぶつかけてさへ花の盛りを見せた。」「左様左様おいらは子供が桃の木梯の木とたづねてくれれば、實の中から芽を出してやるに、竹のしれねえやほなやつらだ。」と噂を竹が聞きて、仲間一どう相談して、「あいつらにははれてはすまぬ。あしたは残らず出でん。」と待つてゐる所へ、又蓑笠に鋏を持ち、けふこそ授け給へと、ちやうど掘れば、待ち構へたる筍によいと五尺ばかりのが出る。びつくりして又掘れば、二本三本前後出る程に、一町四方は竹の子、孝行ものも出る事がならざる内、下から六尺ばかりの竹の子、尻をつきかけるから、前へ飛ぶ拍子帯へつつかけてさしあけられ、コレハどうぢや、と鋏をかついで見廻す所へ、家主が通るゆゑ、「モシ／＼大屋さん、稗蒔はいりませぬか。」

○七 十二 候

扇鶴亭百人作

吉原の居つゞけの客へ、仲の町よりおくり物に、蛤の千鳥焼を持つてくる。「こいつはいい物が来た、雀関中に入りて蛤となる、一つのまう。」としやれる。女郎が、「モシあのすゞめは蛤になると

59

いひすが、ほんの事かえ。「違ひはないのさ、七十二候の内にかく變る物が有る、腐草化して螢となり、田鼠化して鶉となり、芋蟲がてふくとなり、船蟲がとんほになる。其の外蟲も色々變化する物よ。」といふ。側に新造が、「モシそんなら遣手衆は毛蟲のなつたのかえ。」

○駕好

仙路亭蘆翠作

子供にも色々好きがあるものにて、商人やの丁稚十二三にて、使にやると一町ほど歩行くと、木戸際の駕籠舁に、「コレ淺草まで幾らでやる。」「アイ二百でござりやす。」「百五十にまけな。」「誰が乗りなさる、檀那がおかみ様か。」「インニヤ俺がのる。」「とんだ事たの。」「サア使にゆくのだ、負からば早く。」「棒組まけてしんぜろ。」とのせてゆく。いつでものるゆゑ、後は駕籠かきも馴染になつて、「けふは小僧様が使が有りさうな物だ。」とまつて居る。扱其のかごちんはどこからもやりてがなければ、見世の小錢をちつとづゝためてのる。それがだんくゝしれて、伴頭がどうもふしぎなやつとひつとらへて、「コレうぬは此の頃錢を二百おとしたが何にした、使にいつても早く歸る、どうも氣がしれねえ、譯をぬかせ。」とくらはせれば、泣きながら、「お使に行くとき駕籠にのりやした。」「何かごに乗つた、おごつたがきめだ。」「おごりぢやあござりませぬ。」「おごりでなくつてなぜ足をかばつておくのだ、なんとぬかす、あしをかばつて何の用にたてる。」「抜け参りにいきやす。」

○茶漬

吾友軒米人作

武藏野御茶漬といふ見世を出して、殊の外うれる。友達が来て、「コレきつい繁昌だけな、時に障子にむさしの御茶づけとかいたが、ちつとむりだと思ふ。アノ茶づけの始まりは、淺草に海道茶漬といふが有つた。夫れから銀座町へ山吹茶漬がおちやづけの始まり、宇治の茶に山吹といふが有るからきこえたに、むさし野に茶があつてつまる物か。」「成程さういふはもつともだが、おれも海道茶漬が有るから、木曾海道茶漬としようと思つたが、一度でこりくせうとおもつてむさし野とつけた、心ははら一ッばい喰はせる思ひ月さ。」

○田舎者

森羅亭萬象作

だらくなるむすこを、おやぢ勘當せうといふを、母親の情にて田舎の乳母を頼み、こゝろの直るやうに、一二年もそつちで世話してくれとのこと、乳母の亭主ももんまうなれど、正直者のゆゑ、まことの主人のごとく、朝夕こゝろを付ける。むすこも始めの内は小づかひ不自由ゆゑ、内にばかり居けるが、のちは村のむすこもとつれだち、宿場へ二三里馬にて泊りに行きければ、乳母も亭主と相談して、一とまづ親檀那へわび言してかへし申すがよからうと江戸へ来て、兩親の前へ出で、「さてく若檀那様にも、はや一年程るなかに御出でなされましたゆゑ、こゝろも直りました、ばゝアめも参る

569

はずでござりやすが、しつけ時でいそがしくござり申すから、わしが参りやした、どうぞ御かへし申してくださりませ。」といへば、おやぢ、「成程俵めももう二十五といふもの、ちつとは思ひしりをつたらう、おれも六十に及ぶ、じつていになりをつたら、とりしまりの用心にも呼ぶ事もあらう。」「アイじつていまでは参りませぬが、鼻ねぢり位には。」

○閑居

清涼亭菅伎作

江戸より田舎へ引き込みし醫者、久しぶりにて來りて、「さて、私も唯今では在所へ参りてモウ五年、貴公様にも御堅勝でお目出たうござります。」「イヤおまへ様も只今では、おらくでるなかに御出でなさるとの事、いつみてもおわかい、江戸よりはおなぐさみが多いさうで、いぜんよりおふとりなされた。」「それはふだん麥飯をたべて、野びろい所に居るゆるでもござりませう。何事も不自由がちなさ、其のかはりに、衣服にりつばもいりませず、家來は一人あれども供もつれずとよし。」「左様でござりませう。羽織も袖なしですみませう。」「左様々々。」「薬もおまへがふところへ入れて御出ですみ。」「左様々々。」「病人も向うから歩行いて参りませう。」「左様々々。」「人參の代りに干大根を入れてもすみませう。」いしや、「夫れはちと出來ませぬ。」

○丁稚の無心

紀輕人作

ある年季の丁稚、下女のりんが側へよつては、「コレおりんどん、こんたに無心が有るく。」とたびたびいふ。「何だ小ましくくれたがまだ。いけすかねえ。」といへども、餘りたび重なれば、いな舟のいなにはあらず、少しはたうがらしでもくつて見たい心の所へ、又おりんどん無心があると云ふ。さいはひ人もあたりになるず、「コレ太郎吉どん、無心とはなんだよ。」といはれ、「どうもはづかしくて云ひにくい、コレおツつけてください。」「なんのことだ、おツつけてくれるとは。」「おれにおツつけてくんなさいといふことよ。」「コレサそばへよつていはつせえ、おツつけろとは何を。」「おれがくふ飯をば杓子で。」

○高尾

萬龜亭江戸住作

今は昔足利頼兼公、遊女高尾が追善の爲、大川において花火をあげ給ふ。こゝに土手の道哲とて、たつとき道心の念誦して有りける時、ふしぎや紅葉のかけよりも、たへなる聲にて、たばこのんでもきせるより、のどがとほらぬうすけむりと、あらはれ出でたる高尾がいうこん、「申し、道哲さん。」「さういふは、高尾でないか、頼兼公の仁心にて、大川にて花火をともしたまふも、其方の追善くやうのため、未だうかまぬか、エ、淺ましやな。」「アサアその追善はどうぞ花火より外の事を。」「ム、花火はそなたの爲にわるいか。」「アイとほされるにはあきんした。」

569

○辻 八 卦

白鯉館卯雲作

願ひのぞみ當卦ほんけのうらなひ、失物待人夢はんじ、相場の高下まで見とほしのうらなひと、辻に立つて居るところへ、きおひが二三人つれて来て、「萬八ちつとまつてくれ、おらがかゝあがはらんだが、男のがきかあまか、十二文がうらなつてもらふべい。」「コレサよしやれ、おのしが子なら男だとも女ともいへばいいが、鬼子だともいはれると外聞がわるい。」「ハテおに子なら見世物に出して錢まうけをするわい。」「何さしよせん辻八卦が言ふ事があたる物ぢやあねえ、夫れよりは十二文出して一ッばい呑むがいい。」といふを、八卦おきが聞いて、「コレあんまり安くするな、そんなものぢやあねえ、なんでも見とほした。」「なんだ見通した、おく座敷が聞いてあきれるわ。」「こいつがく家業の邪魔をしやあがる、うぬはどこのやつだ。」といへば、きおひ、「あてて見や。」

○家 名

浅草庵市人作

コレ此中土手で里遊にあつたら、五明樓へいつたというたが、どこの事だ。「扇やのことさ、五明の扇といふ事があるから、夫れでいふのさ。」「そんなら大文字やは何と言ふ。」「文樓と。」「ハテナ丁子やは。」「丁子樓よ。」「松葉やは。」「松葉樓よ。」「こいつはおつりきな、そして玉屋はなんといふ。」「あれは玉樓と云ふ。」「そんなら越前やは。」といはれて、困つた顔をして、「越前やか、アノ番多樓。」

○閏 七 月

四方眞顔作

年ごとにあふとはすれど七夕のぬる夜のかすはすくなかりけり、といへど、七月に閏ありて、織女も二度逢ひ給ふ。御よろこびかすくにて、牽牛のかたより御文に、「こんどは牛もおそくのろつき候まゝ、そくじつ鬼が四つ手かごにて参り候はん、そもじにも家根船にて天の川の岸に御まち、めじるしには竹の枝に短冊をおつけおき。」との事、織女もさうくしたくなされて、天の川に待ち給ふ。牽牛もかごより乗り移り給ひ、「今宵は船にとまる支度、蚊が出たらどうせう。」といふ所へ、風の神の聲として、「萌葱の風やアかぜく。」と賣りきたる。さいはひと是れをもとめ、「サア是れからは天人の藝者を呼びにやれ。」と、それよりびは琴をひいて、辨天乙女といふ藝者の聲に、天道丸の出来星が、「あり難いありがたい。」といふ所へ、船頭の明星が、「もし舟をさげやせう。」といふ。「それはなぜ。」「今あそこへ雷がばか太鼓で來ます。」

○福 鼠

談州樓焉馬作

今は昔甲子の夜、白鼠一疋來り、見てゐる内十二疋子を産み、その十二疋がまた十二疋つゝ産むとだんく産んで二三疋になると、出ていつてしばらく過ぎて、大きな鼠は大判をくはへて來る。中鼠は小判、小鼠は小つづをくはへてくる。後には千兩筥を車につんで鼠がひいて來るやら、もう内に

569

置く所がないゆゑ、居所にこまり二階へ上ると、又二かいへもるられぬ程金をはこぶ。戸を明けて廂へ出ようとすると、ひさしへもだん／＼金がつんである。こいつはたたらぬと、漸く大屋根へ逃げ出て、ほつといきをついでる間に、出る事のならぬやうに金をならべ、下を見れば、大勢のねずみが車で金をつんで来る。コレハたまらぬ、ア、寶船々々。

嘶落 無事志有意 終

跋

いさましき物初鶏の聲、顔見勢のしばらくと、例の簷上なごんも、三升最辰の口癖なり。遠からん者は落嘶にきけ、近くは讀んで目にも見よ、桃栗山人柿の素袍、談洲樓の戲談のむしろ、其の秀逸を開き見れば、頼に笑ひを催して、お臍に福茶を沸かす。嗚呼此の草紙の世に弘まらん事、東は奥州外八文字の姉女郎、西は新造禿遣手、南はきの字や臺の物、北は夜毎の地俠客まで、通言の及ぶ所、千里も行き萬冊も賣れ、春の始めの初幸便、無事志有意と題せしを、卷末せよと需めに應じ、智慧をふるつて花咲の翁、をこがましくも是れをしるす。

560  
9

560  
9

近現代日本文學系  
第二十二卷

昭和三年五月二十五日印刷  
昭和三年五月二十八日發行

(非賣品)

編輯者兼  
發行者

東京市麴町區內幸町一丁目六番地  
國民圖書株式會社

右代表者

東京市麴町區內幸町一丁目六番地  
野中次郎

印刷者

東京市本所區番場町四番地  
井上源之丞

印刷所

東京市本所區番場町四番地  
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市麴町區內幸町一丁目六番地  
國民圖書株式會社

電話銀座 七三八三番  
三六八八番  
振替東京 五二二九八番

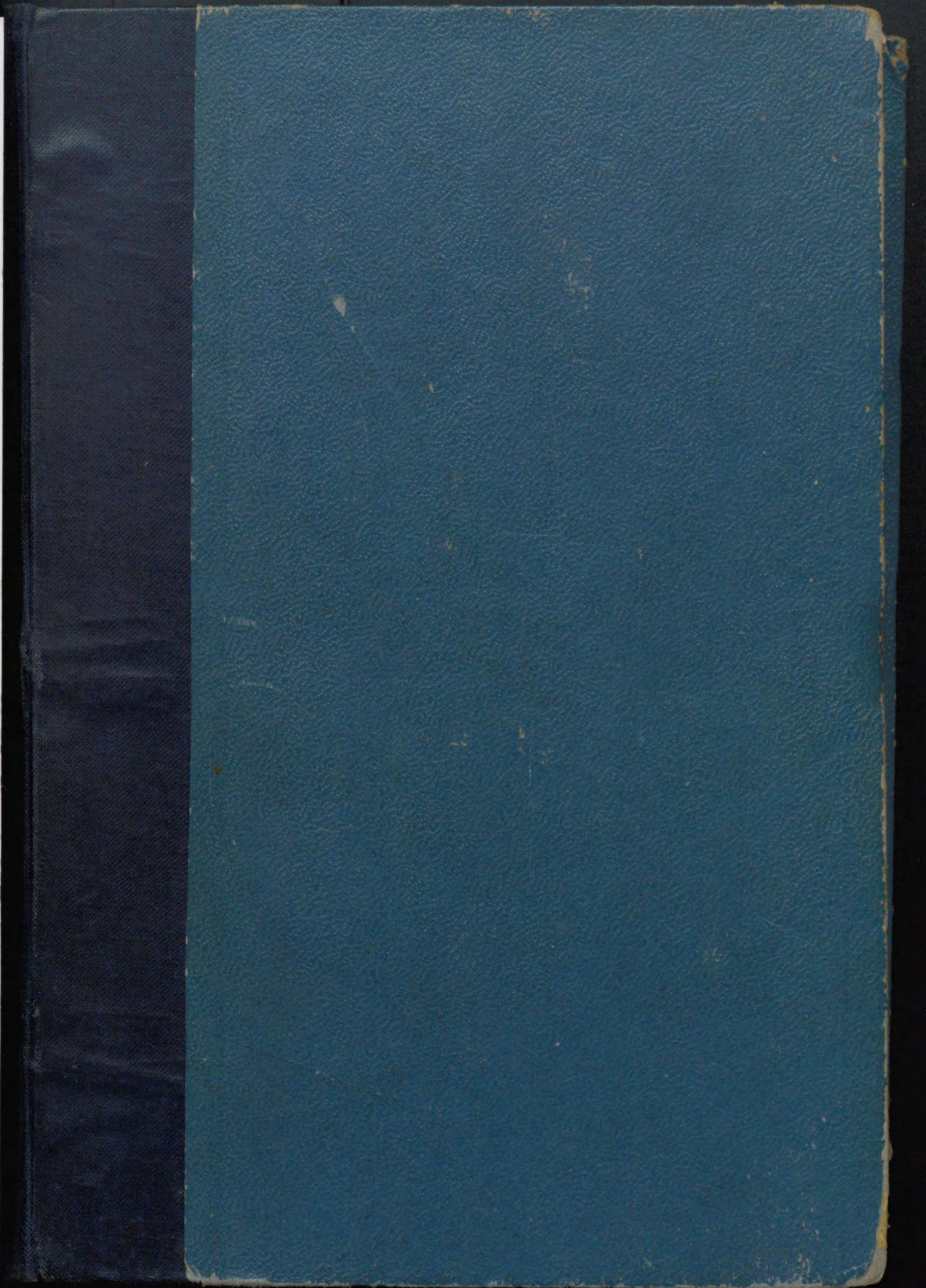
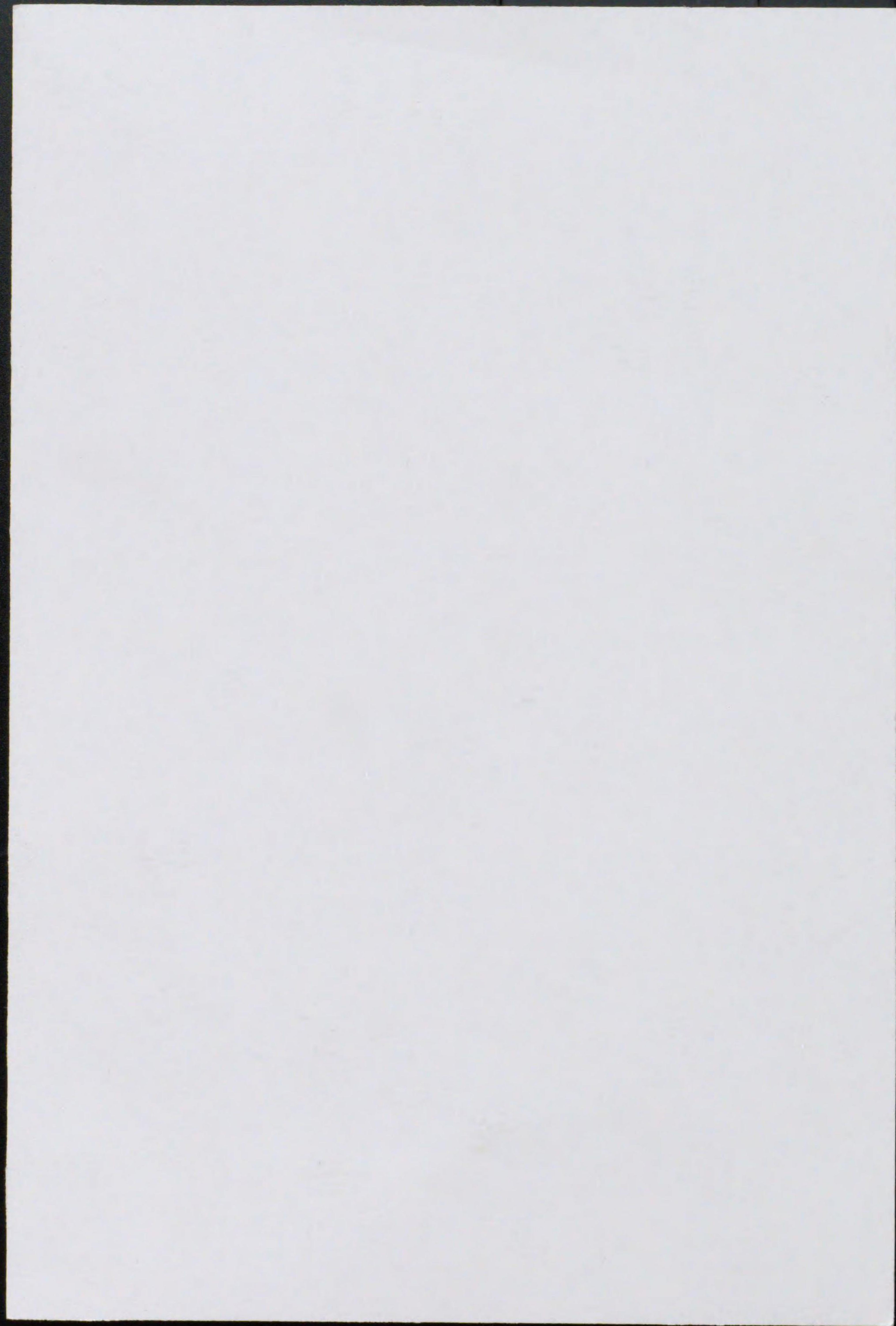




~~560~~ 918.57  
~~9~~ KI 2  
(22)

560  
9

181  
KI  
22

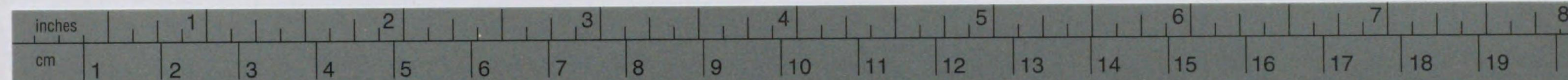


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

